江戸名所圖會

ル 4
3605
2

連れ燈の光ハ玲瓏と流れ映せ樓船扁舟所せ

一時ハ水面を覆ひかくしてあるも陸地ハ異ならず

耳ハ満く囂しく実ハ大江戸の盛吏なり

此人数ハ

ゑ人ゑを探ぬ　　芭蕉

この句の句風ハ

清水如水宅地　横山町ハ住ゑるとのつゝ水ハ藤根堂と号ス狂

歌ハ名あり　常ハ酒を飲む時ハ酔ふる時ハ思ふ〳〵とく猥ハ言語を発せ

人名ハ藤根堂と呼ぶ　按ハ雄長老ト養又近くハ九州の甚久

法師ハ各狂奇ハ名あり　家集もあれと此如水ハ名さへ知る人まれなり

如水一時大和國法隆寺ハ蔵ふる賢聖の甎とつくる器物を

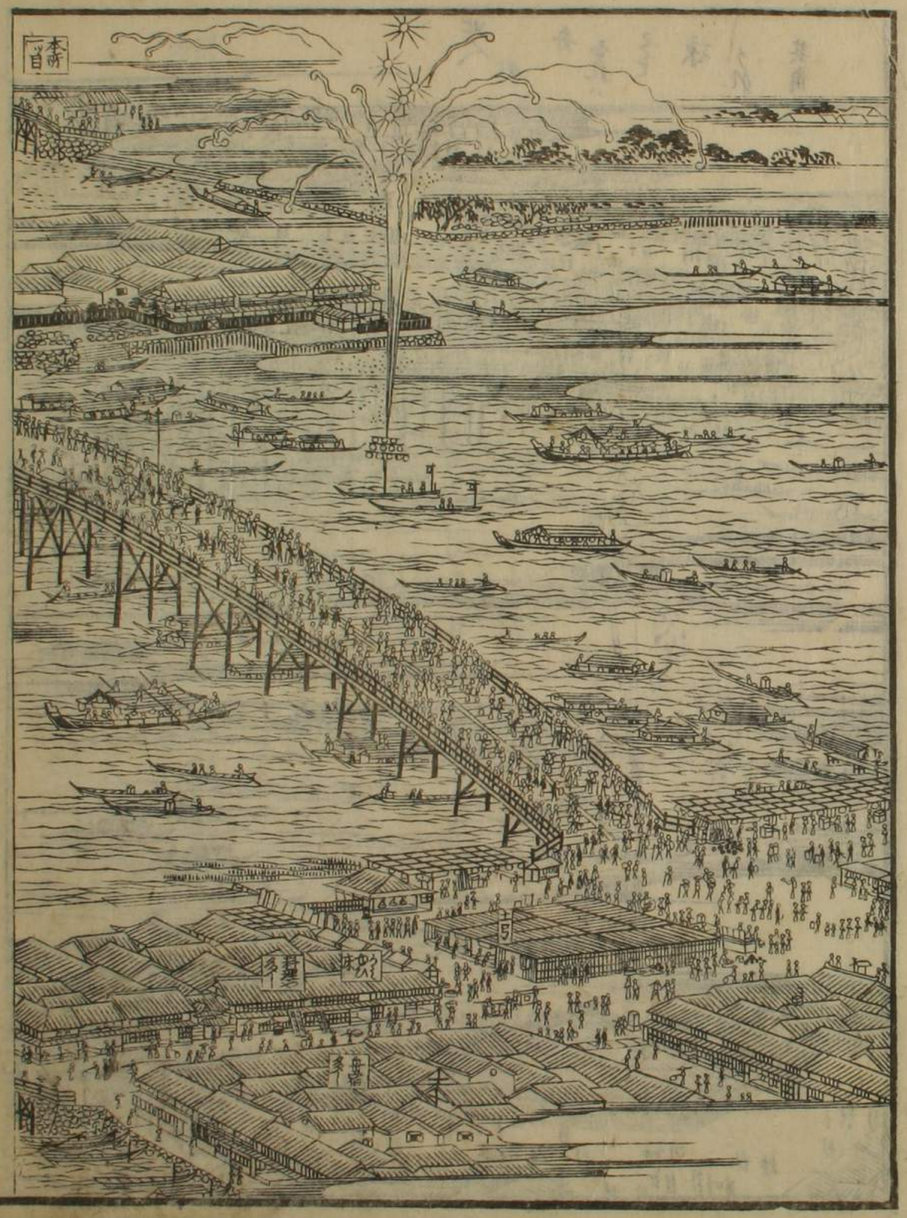
見るに後甎ハ彫物を造りしを得たりしも鈍刀を用ひく

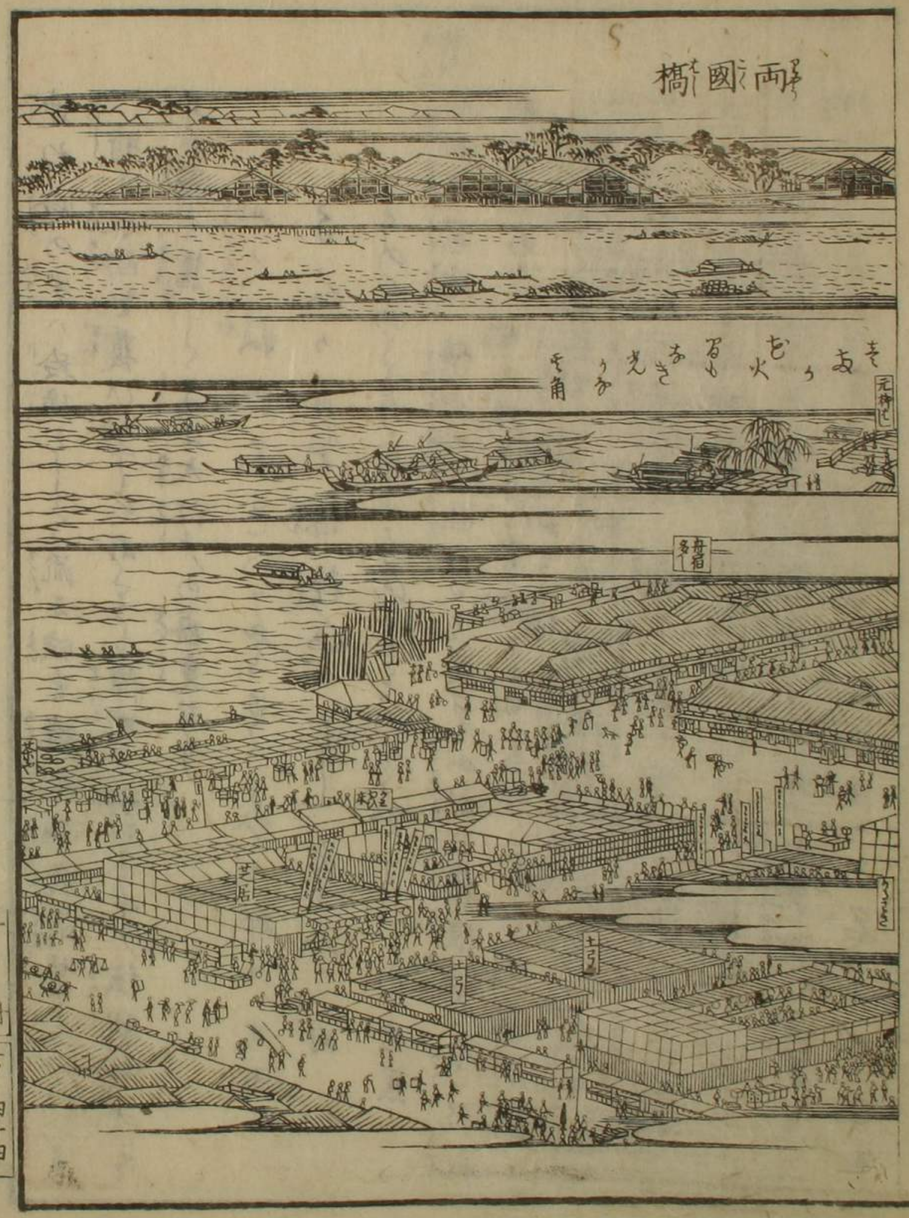
其巧尤絶妙なり依て需多ありしれハ此匏瓜の名ハ身を

押へられしとの意ゆく自ら迷淵蟠鯰候とそ名のりる住家

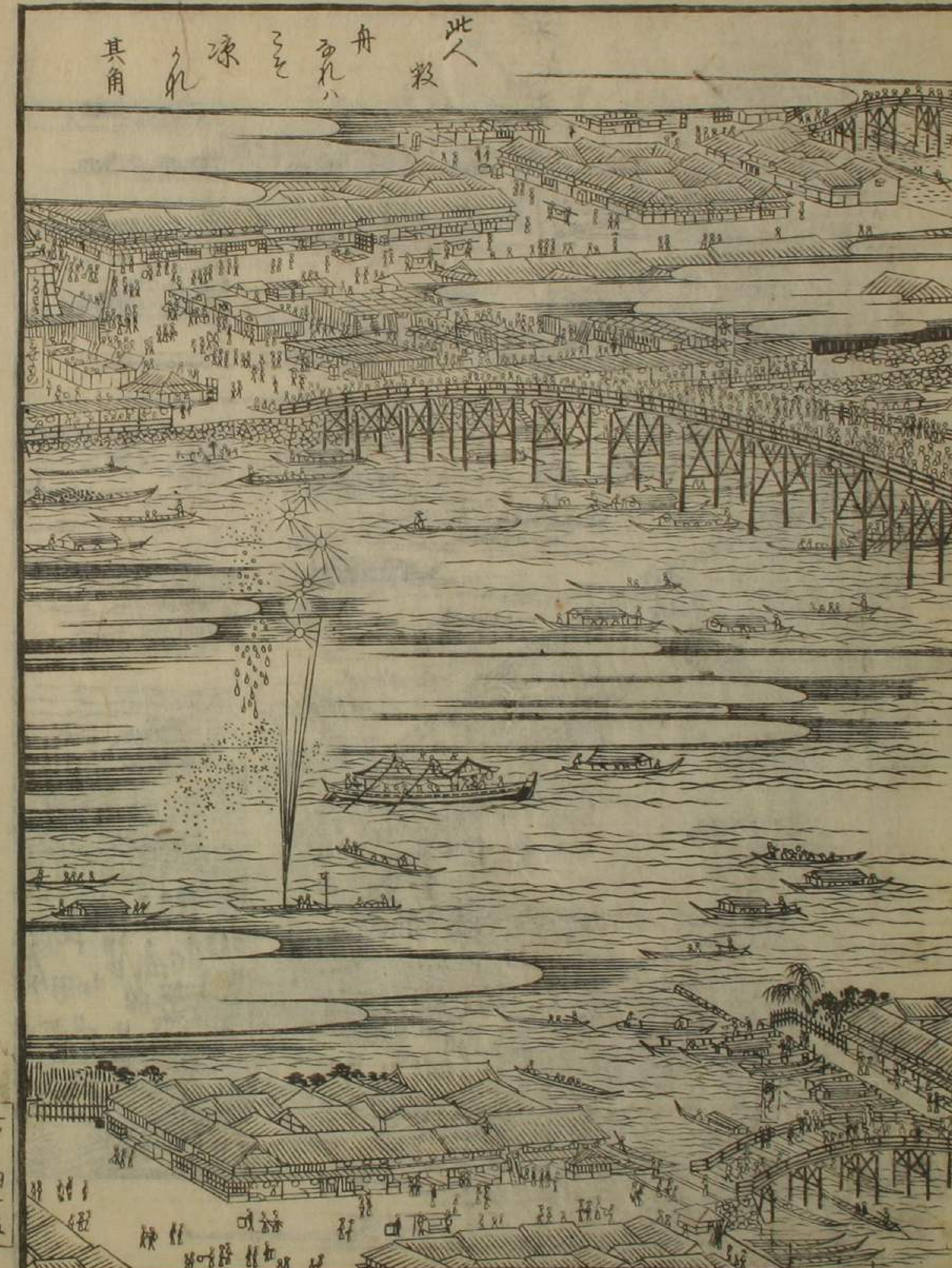
昭和九年四月五日
故三上於菟吉氏より
三上扁吉氏
寄贈

昭 ル4
3605
2




両國橋

より東に薬研堀と云所あり 其辺知人の許に行て楼上より
遠近を見やりて
見わたせハ寒ゟ薬なり薬研堀月ハ白湯にてかけハ水にて
又ある時漁父の辞の意をよめる
世ハ皆あり我ひとりのミ濁酒酔て楼にてさらふの水
享保十三年戊申正月三日朝起て
公事喧嘩地震雷火事の跡ハ飢饉疫病なき国へゆく
かくよミて同じ五日の暮方剃頭湯あミし太神宮を拝しまつり
しまふに終をとられ 行年七十二歳今も浅草金竜寺に墓碑あり石を以て瓢の形に造立す 如幻菴東湖老和尚此如水か臨終の
記をつくれてうりとのり 按に墓碑に一陽如睡とあり水睡同音なれハ其臨終此
相を表して浅文字を如睡と改めしなるへし欤
杉森稲荷社 新材木町にあり 俗に当社ある所を新道と字す 社記云此神像ハ
相馬の将門威を東国にふるひせし頃藤原秀郷朝臣誅伐
の計策を廻らし此御神の加護に依て遂に将門を亡しけり



杉森稲荷神社

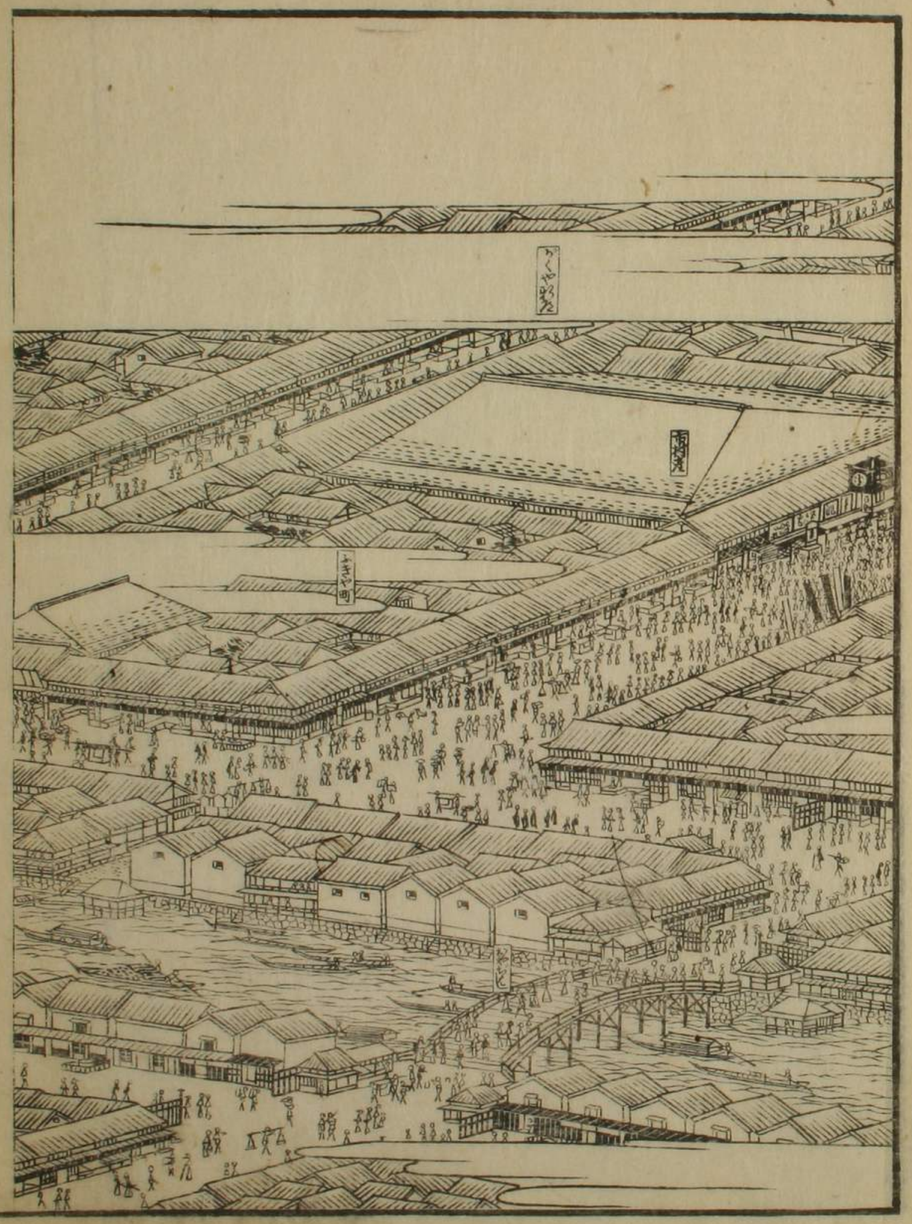
後靈夢を感し此地に至り稿くゝる杉の森あるを地に崇め祀る
當社寛正の頃東國大に旱魃を太田道灌江戸城よりひろく深く
是を患とし此御神に禱るに其驗ありて雨降り百穀大に
登る依て頃山城國稲荷山を模して伍社の御神を勸請し
奉るとなり毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀也當社始は
園にありて恭詣の道なりしに元祿十六年本多彈正少弼忠晴寺社の
觀林なるを時社へ恭詣の道を開きさせ人家元祿の頃此地は小針孫右衛門と云ふ
立つと深りしに又此地の或古老の話に寛文の頃此地は後延宝七年五月二十九日
商戸の地ゆゝく彼宅地にあるを稲荷の祠なりしを現然と我れは諸人皆奇と
此辺火災に依て焦土となりし頃此祠の
結川氏某深く信仰し新に姪子と姫太神とを相殿に祀ると云又或人云長谷
川町町名を祢宜町と云昔當社の穢を時祢宜の住し所なれは名を
とられとも此説信しがたし

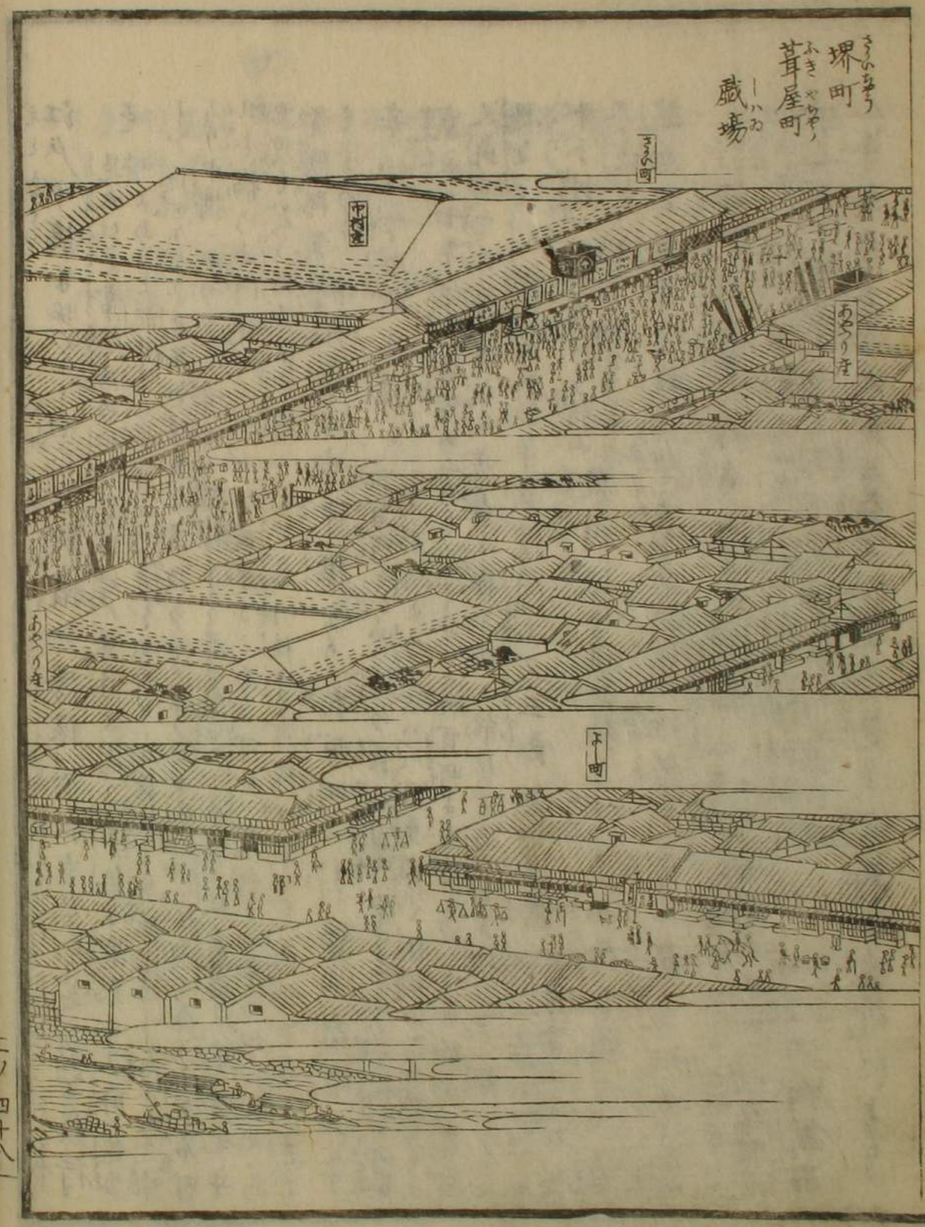
歌舞妓芝居

堺町 木挽町 寛永元年甲子の春中村
甚三郎 狂言座元の始祖なり初道頓と号す昔禁闕及び宮中に
時個引の音頭部を組ハしめらしし又ハ官女安宅丸大江戸の川口へ入津の
摩 なるを係者狂言の衣裳及び笛鼓の揚琴等今猶を家に伝へて重宝
名を賜ふ上京せし時甚三郎新発
祢ハ皆中村座に規模明石と云ふ

官府の免許を蒙る

江戸中橋に地を始て太鼓撞を揚猿若狂言尽の芝居を興行
也是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子と云ふる草紙に寛永より前ハ芝居
町にあると記せしハ柴井町のことを云なるへし按に芝居ありしかを呼
しに後世に至て芝居を柴井に書改めるを誤りしなるへし又江戸名所記に芝居町
より中橋へ引移しなるを事跡合考に寛永元年
日本橋の西河岸町に芝居を取建るとあり可考寛永十八年の印行のそろ
冊子に中橋に米島丹後守奇舞妓ありと高札を建るとして
貴賤群集同九年壬申中橋より祢宜町へ引遂に慶安四年
辛卯今の地に移る祢宜町を人形町と字ハ今の長谷川町の今俗に此和
寛永二十年印本吾嬬の外薩摩太夫虎屋の操土佐の能なとあるを唱へ
又角力の屋敷に住ふ奇舞芝居
翌年 又寛永十一年甲戌村山又三郎といふ者此又三郎とハ名護屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山泉州堺より此地に下る公許を得て常
又ハとゝ者の次男なりとの
芝居を興行し能の狂言を役者をまゝへ舞子六人に勤
しむ市村羽左衛門座是なり菖蒲屋町狂言座元の興起なり二代目を
勘三郎の弟子なり寛文四年より始て堺町狂言座元二代目明石
道具建を製出に加ふ其頃市村座と大芝居と称し引幕積狂言を工夫し其後萬治
三年庚子森田太郎吾伝と云ふる者是も官府の免許により


ごくもん
中之島
ふきや町
橋


さかひまち
葺屋町
蔵場
さかひ町
中之島
あらい屋
あらい屋
本町

猿若狂言之古圖

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といふる者の二男又七といふるを養子とし名を森田勘弥と改む（木挽町狂言座元なり）同巻木挽町の下より記へ其餘堺町菅屋町の間より操座木偶芝居ありて四時より賑ハへり（元禄前後の江戸鹿子より堺町菅屋町の二丁ハ古へより操見せ物又ハ狂言瑠璃天満八太夫江戸孫四郎江戸名所記ハ江戸大薩摩上佐の太夫和泉太夫の説経鶴屋源太郎ら南京あやつりあり）

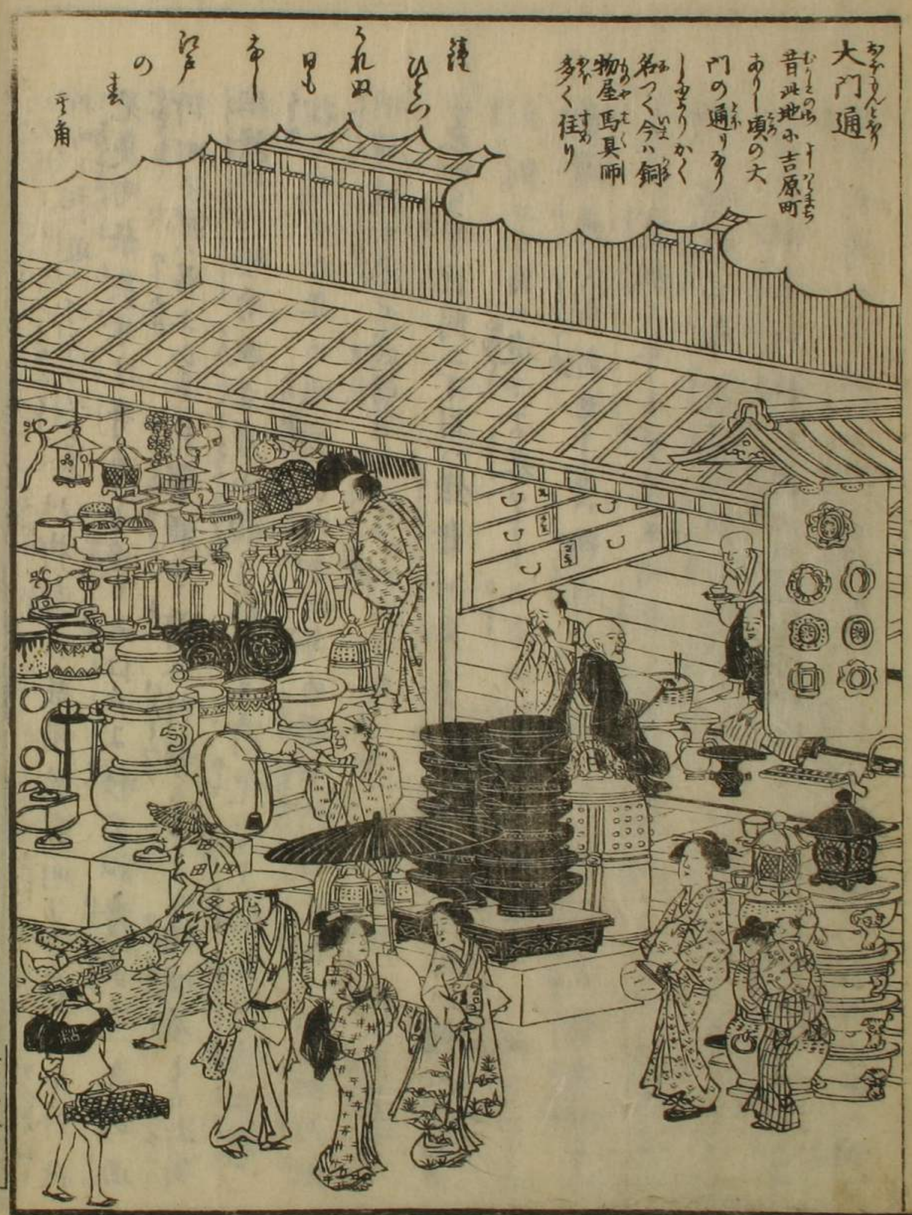
吉原町舊地　和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり（住吉町難波町俗称なり此不の川岸と竈屋多き所の溝ハ則昔の曲輪の外堀ありと云）慶長十七年庄司甚右衛門

ものゝ者街を一所より定めゆゑり度旨官府より訴へ願ひ加ふ初て此地を賜ハり花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸より定まる傾城町もあく二軒三軒つゝかゝこゝふ散在せしゝ其中軒を並へゝ〳〵ハ麹町八丁目あく十四五軒ありく何ゝも京六条より迄る又鎌倉河岸ゆゝを十四五軒大橋柳町ゆゝを廿軒ありしゝと云

（大橋と云ハ今の柳町へハ駿府弥勒町より移る外伏見夷町奈良木辻等より追く大江戸より移る此柳町と云ハ道三河岸の辺なり）慶長十一年の頃柳町の地ハ召上られ元誓願寺前へ引移るゝ〳〵傾城屋とも打寄相談の上場所取立度由願ひ出ると御免なるゝ庄司甚右衛門初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃仰付元和三年霜月地形普請出来て商賣せり（江戸町一丁目ハ浅一統の後初て開基せり）

ゆゑかく号け同二丁目ハ鎌倉河岸より引京町一丁目ハ麹町より引同二丁目ハ追〻より来るゝ上方の傾城屋を置ゆゑ一両年ゆゝて普請悉く成就せしゝ〳〵ハ新町と名付くゝ角町ハ京橋角町より寛永三年より至り五町全く家居落成しゝ此に移る然より明暦二年浅草の後今の地へ迁さるゝを中ゝさゝゝと明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火より焼亡す依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る

菊屋
きくや


大門通
昔此地ハ吉原町
あり一頃の大
門の通り多り
しかりかく
名つく今ハ鍋
物屋馬具商
多く住り
江戸の
玄
平角

普請の間今戸烏越山谷の間に借宅いとし渡世もいとをゆるさる花街今は舊地に在るハ戲場相接し滋繁昌をハ極むへくもと祝融の祟弥高くのうへ彼地へ移され

おほやけの御恵いと有難きなり

第六巻新吉原町の条下に詳なり

桜は可舞妓ハ其始遊女より出る名ふ〻奇ひ舞の妓女なりと

異語なり昔ハ〻高貴の人は愛せふ長門守丹後守

抔と呼なし〻るより〻遊女ある奇舞妓役者ふ太夫の称役者

故は今狂言座元を太夫元と唱へ若女形の藝は長しうるを太夫と

呼ふ余風の〻しれと今大江戸ふハ遊女は太夫の称をるの

寛永十八年の印本そろ物語の吉原町の奇舞妓女を愛

長門守移山主殿米島丹後守佐渡島正吉村山左近國本織部北野小太夫出来島

中ゆも佐渡島正吉村山左近國本織部北野小太夫出来島

長門守移山主殿米島丹後守名を浮遊女あり是今ハ一座北

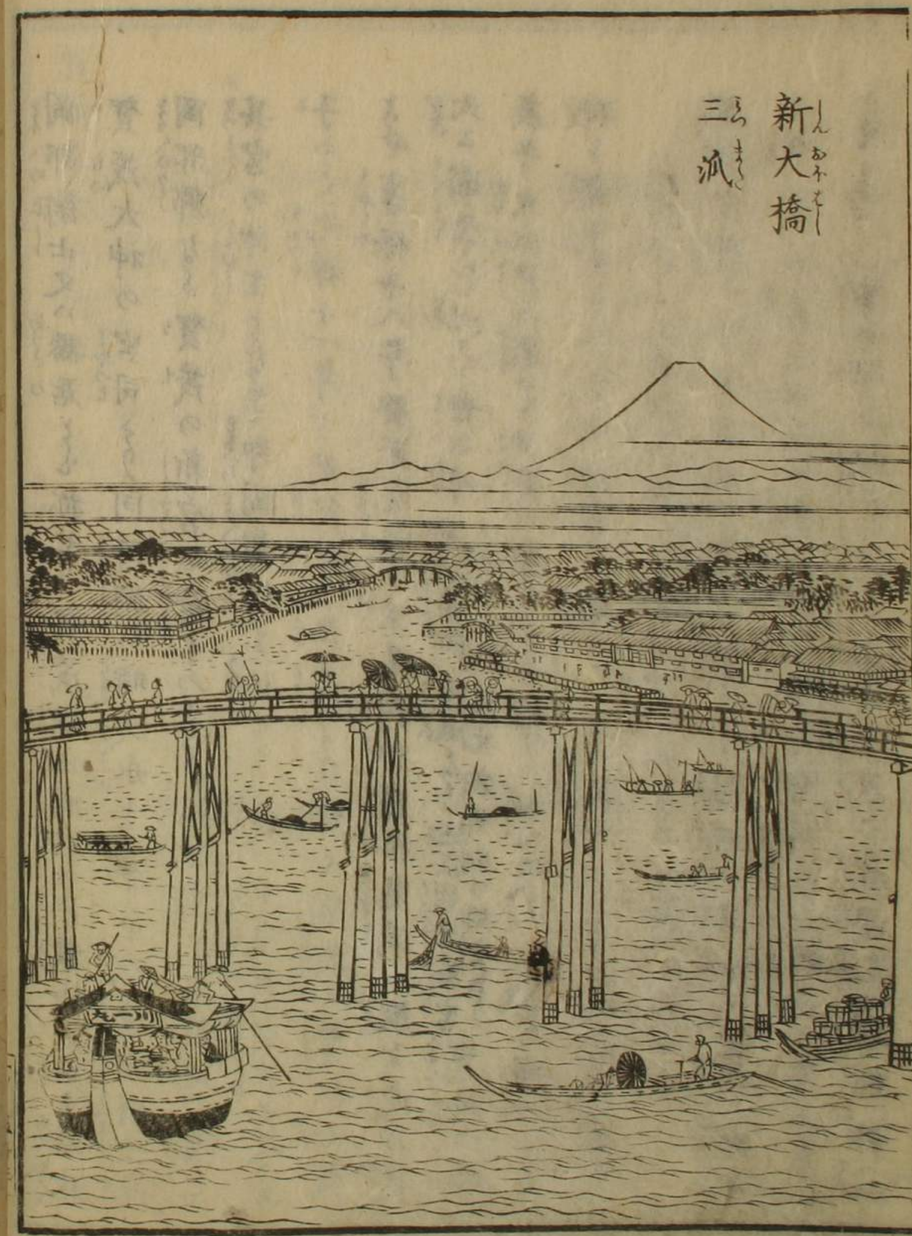
頃奇舞妓和尚と称せしそを又日を重ね洲町繁昌せ

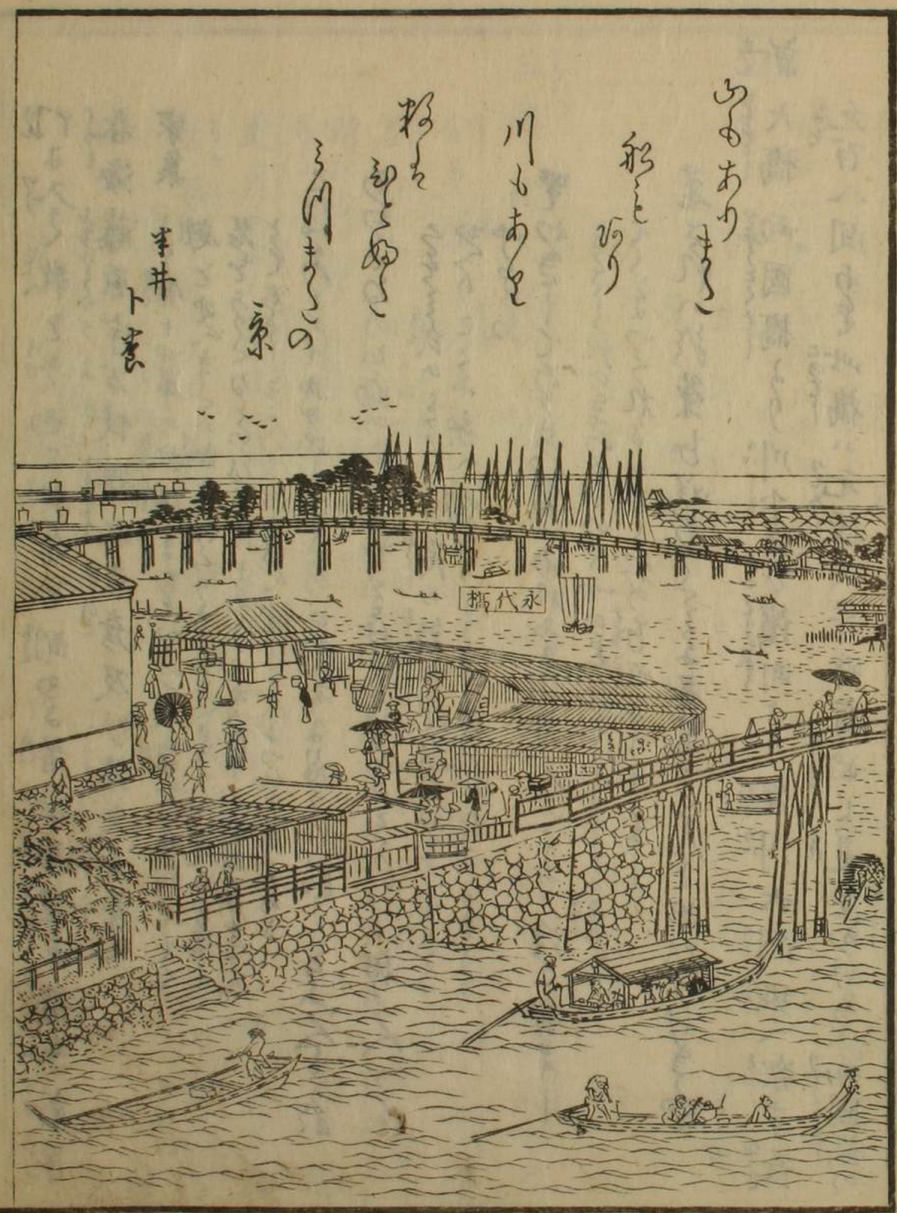
町割をふ〻本町ふひ京町江戸町伏見町堺町大坂町墨町新町抔と名付家

居美〻しく軒を〻〻〻草の仮家をあ〻〻〻〻〻揚屋町を置き又本町を中は

臺を〻〻〻ひ置ひ〻〻〻ふ與彩〻〻〻〻〻筋ともく横町〻〻〻〻〻能奇舞妓の舞は

芝居〻〻〻〻〻奇舞妓を〻〻〻〻〻

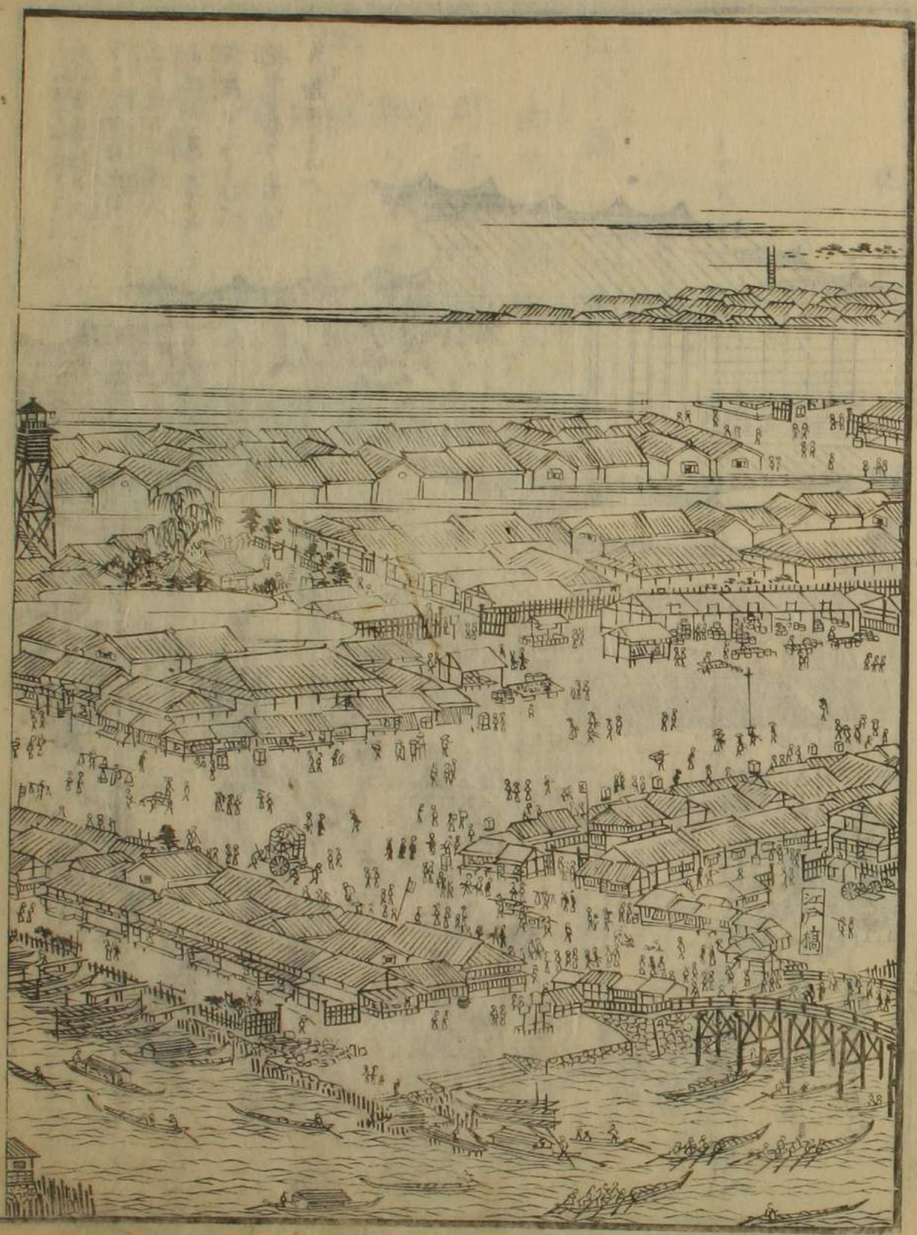




半井卜養

門に入て教を受世に其名を聞る者本居宣長橋千蔭平
春海藤原宇万伎揖取魚彦及ひ倭文女等之
家集

寛政十四年の秋演劇の事ありしに
庭を世へまくはの畑に
名をあらはすの
こ
あ
ね
ち
の
の
の



四日市

在人間外　長嘯高吟雜掉歌

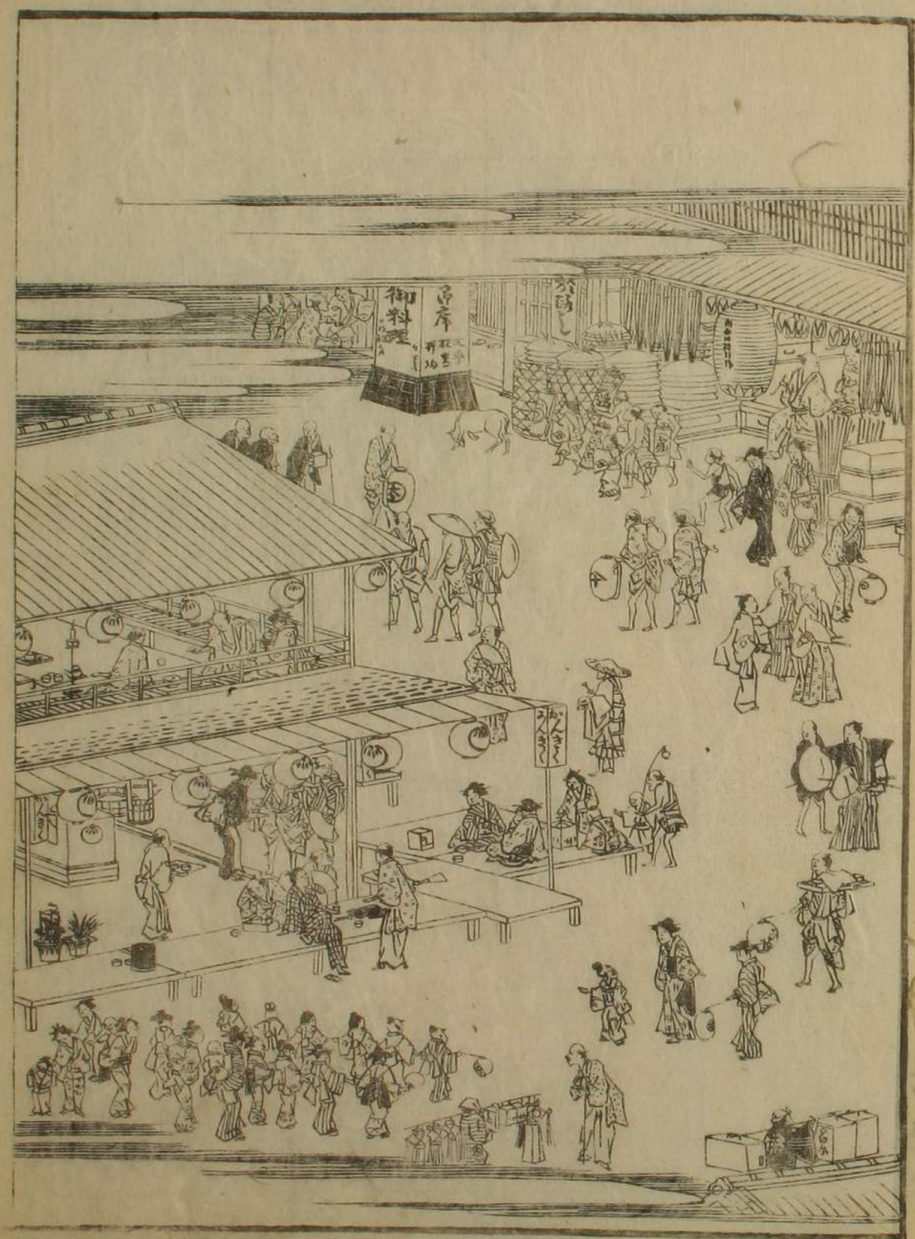
人〻ふとふかつとく八月の十六夜三河ふ
くうくく服部ん寺りしふ沈人多集るの
年十六なりとつく

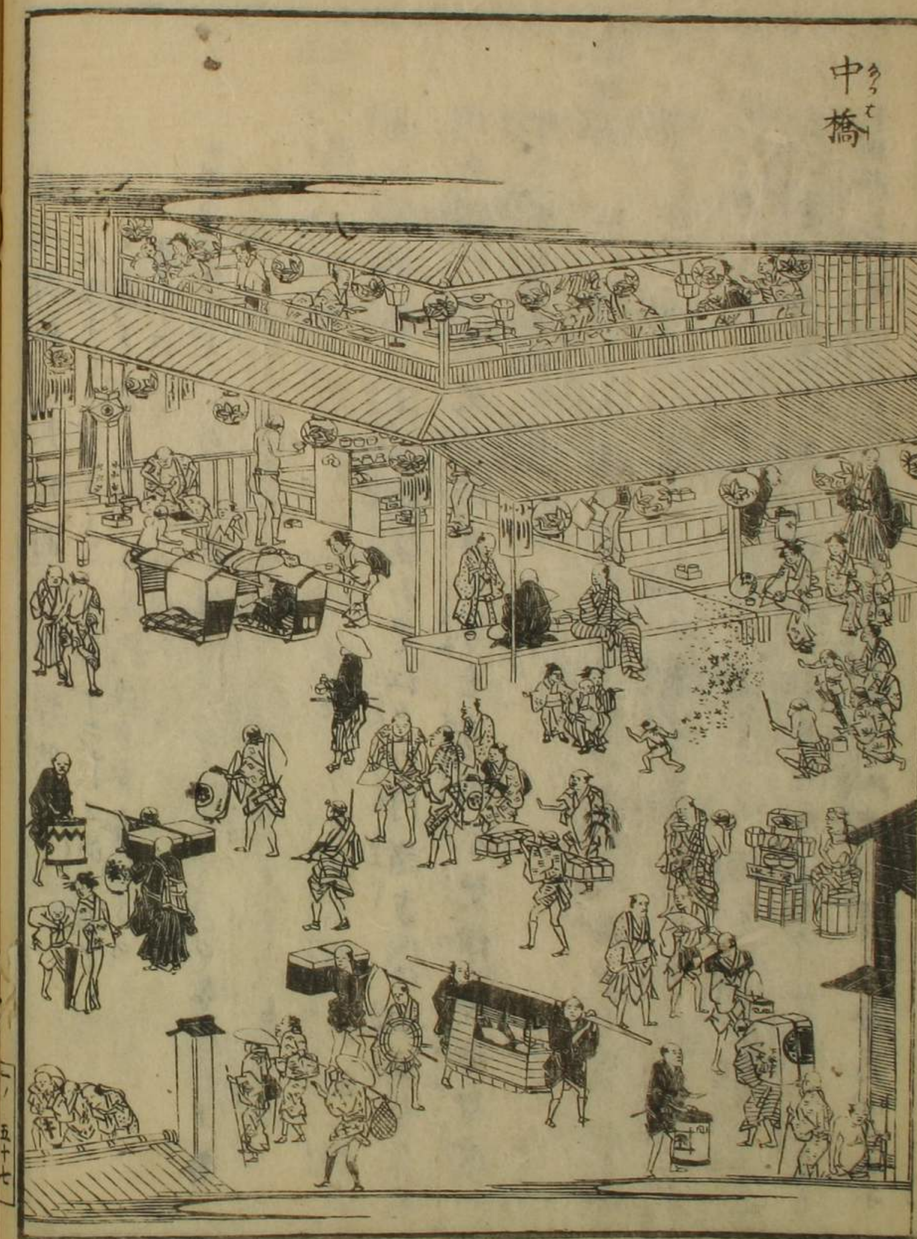
夫〻きくも二八の十六夜月をこそ　まつとあらことのてあい　卜養

こもあり夫〻ふもあり川も沈ふ敷ハこと海くこふ里ふ系　仝

江戸橋　日本橋の東よりあり伊勢町より本材木町へ行間よ架ル
南の橋詰巽の角よ船宿あり江戸の内諸方への船場あり又
同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の
船〻ふ集ふ故ふ名とす

四日市　江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市
場とのゆ〻村ゆくのゆ〻へハ今の繁華のめさるゆなるれハ萬の賈
街も市をなす〻く交易せられハ得〻〻なよ而〻に毎日市を
立る區を名つけて某日市と云羽州のあ〻りふハ二日市と云より
十日市と云近區の名ふ沈き交易せり此地も昔ハ毎月四の日ふ


御料理


中橋

市を立し和なりとを彩ふ今も其遺風あく草物又ハ野菜の類ひ其余乾魚なとの市ありて繁昌の地なり此地に根津権現の御旅所あり

正德年中ゟ造営あり

同所河岸ゟ傍く封疆藏あり下より石を以く畳揚上ゟ家根を覆ふ

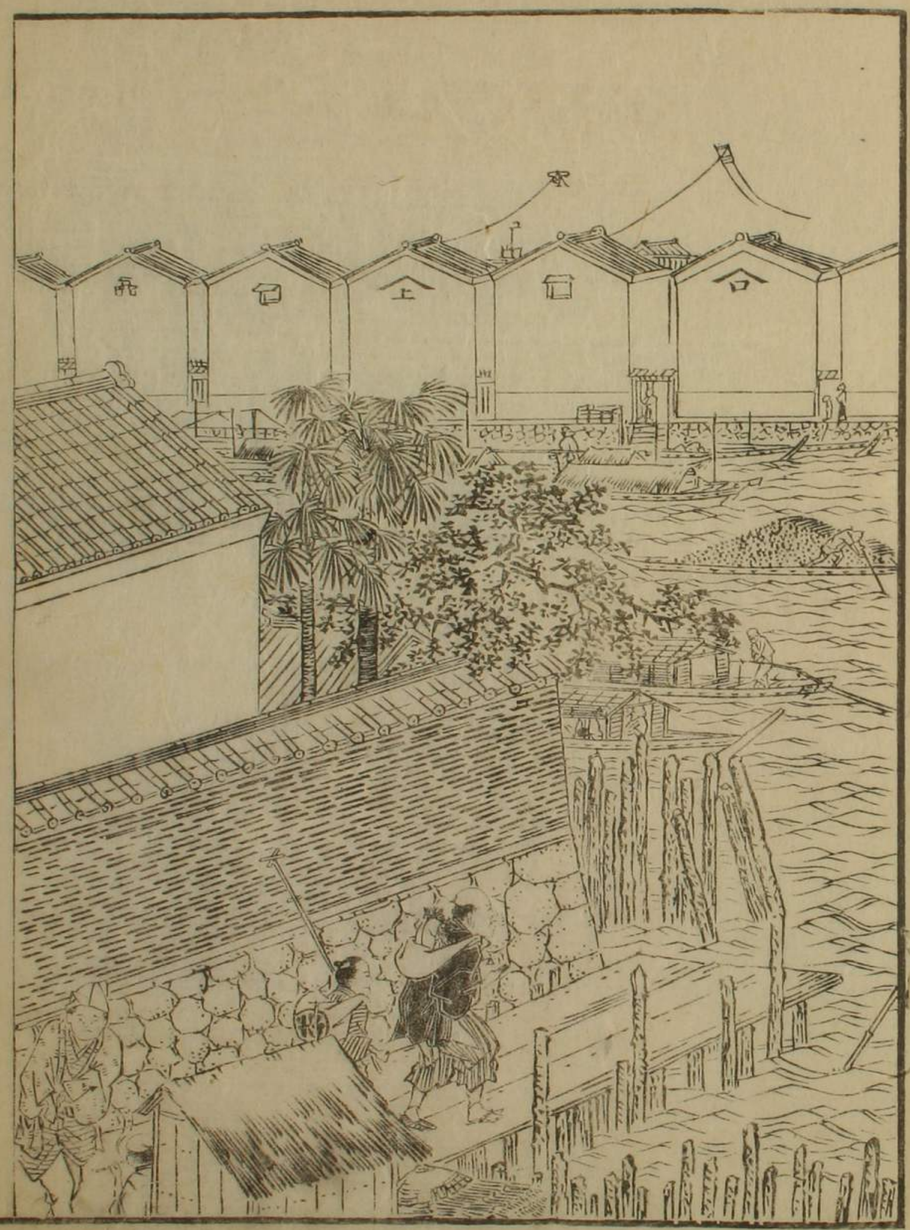
明暦間板のむさしあふ橋の南萬町より四日市辻の町屋を取除け高さ四間ゟ川端より引下る町家あるを此所北ゟ東西二町半ゟ土蔵を畳あけらると云く今恐岸島ゟ四日市と

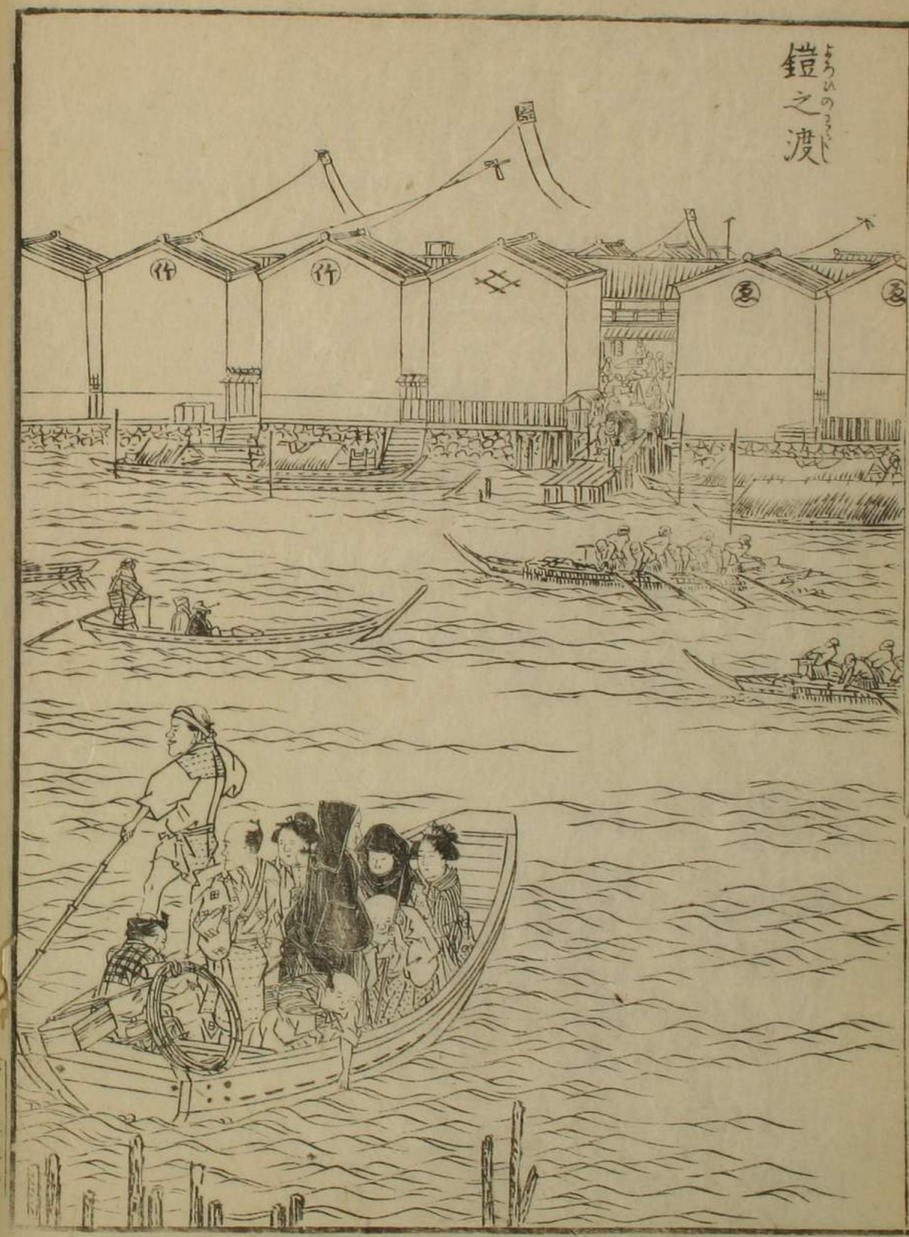
祇園會旅所　南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻ふあり水社ハ神田明神の地ゟあり祭所素盞嗚尊ゆ一て是を大政所と称せり

毎年六月七日ゟ十四日帰輿一なる其間恭詣多く甚ふきハへり

鎧の渡　茅場町牧野家の後を云此所より小網町への舟渡を

ちろ唱へ往古ハ大江なりしとなる里諺ふ云永業年間源義家朝臣奥州征伐の時此所より下總國ゟ渡らんとを時ゟ




鎧之渡

暴風吹發して逆浪天を浸し既に其船覆らんとせ義家朝臣
鎧一領をとりて海中に投し龍神に手向く風波の難なく
らしめむるを祈請を遂ふはうなく下總國に着岸あるも
あり此所を鎧ヶ淵と呼へりとなり
牧野侯の庭中に
ありと記せり
元禄開板の江戸鹿子に平持門
此所に兜鎧を置兜ヶ塚を築く

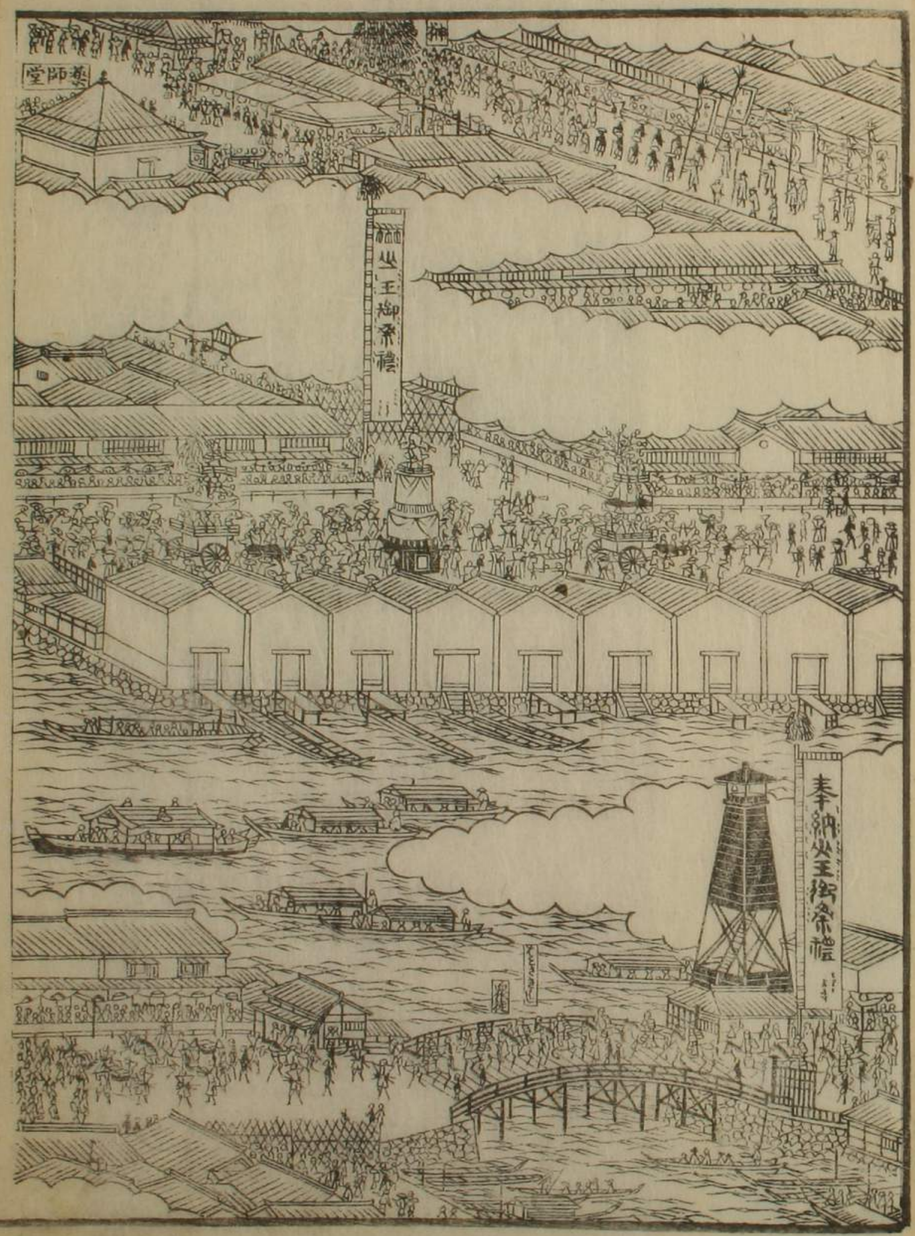
兜塚　同所　海賊攜の東詰牧野家の庭中ゆゑり源義家朝臣
奥州征伐凱陣の節先の報賽のため且ハ東夷鎮護のなると
して日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き
篭めしとなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮守小祠
あり
紫の一本双弟に甲山とあり藤原秀郷平持門を討
首を曽と共に持添き曽をハ此地に埋めるとあり

永田馬場　山王清旅所　茅場町にあり遥拝の社二宇並び建て
寛永年間此地を山王の清旅所に定らるとなり
一宇ハ神主樹下氏持
観理院持し
隔年六月十五日御祭礼ゆく永田馬場の御水社より

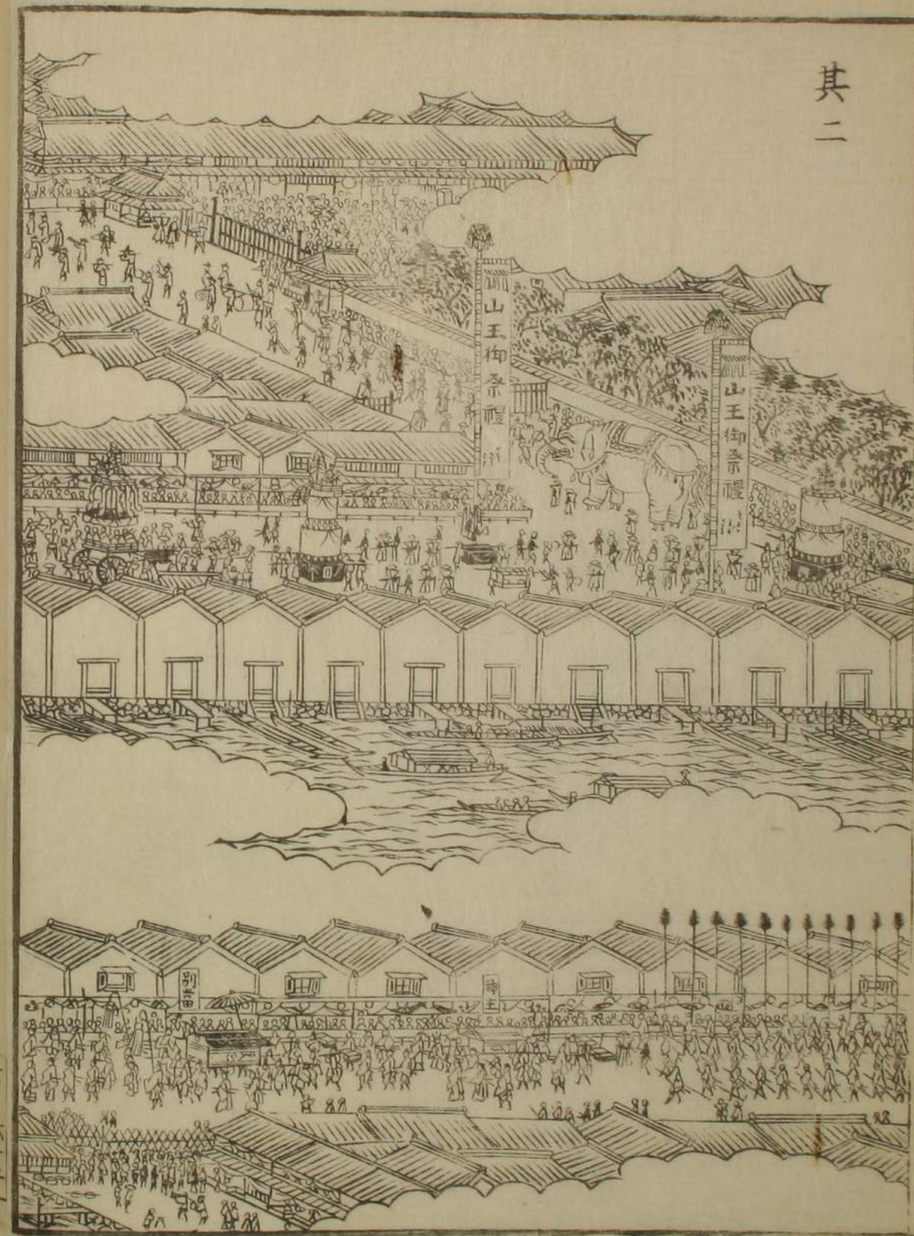
神輿三基此所に神幸あり假に神殿を儲け供御を献備し
別當ハ法樂を捧け神主も奉幣の式を行ひ夜に入て帰輿
なり其行装榊大幣菅蓋錦蓋雲のごとく社司社僧ハ騎馬に
跨り或ハ輿に乗り前後に危後を諸侯よりハ神馬長柄鎗
を出せられて途中の供奉厳重なり又氏子の町々よりハ思ひくに
練物あるひハ花屋臺車樂屋ふ錦爛純子抔のまん幕を打
各手を出立花やうふ羅綾の袂錦繡の裔を引ひ　粧し
魏く堂々として善美を尽せり　此日　官府の清沙汰とし
神輿通行の清道筋ハ横の小路々ハ矢来を結ひ往
来を禁せらるる実に大江戸第一の大祀にして一時の壮観
藥師堂　同く清旅所の地にあり本尊藥師如来ハ恵心僧都の
作なり　山王権現の本地佛にして慈眼大師勧請しなり
と云ふ縁日ハ毎月八日十二日正五九月昔御帳ゆゑ門前二三町の間植木の

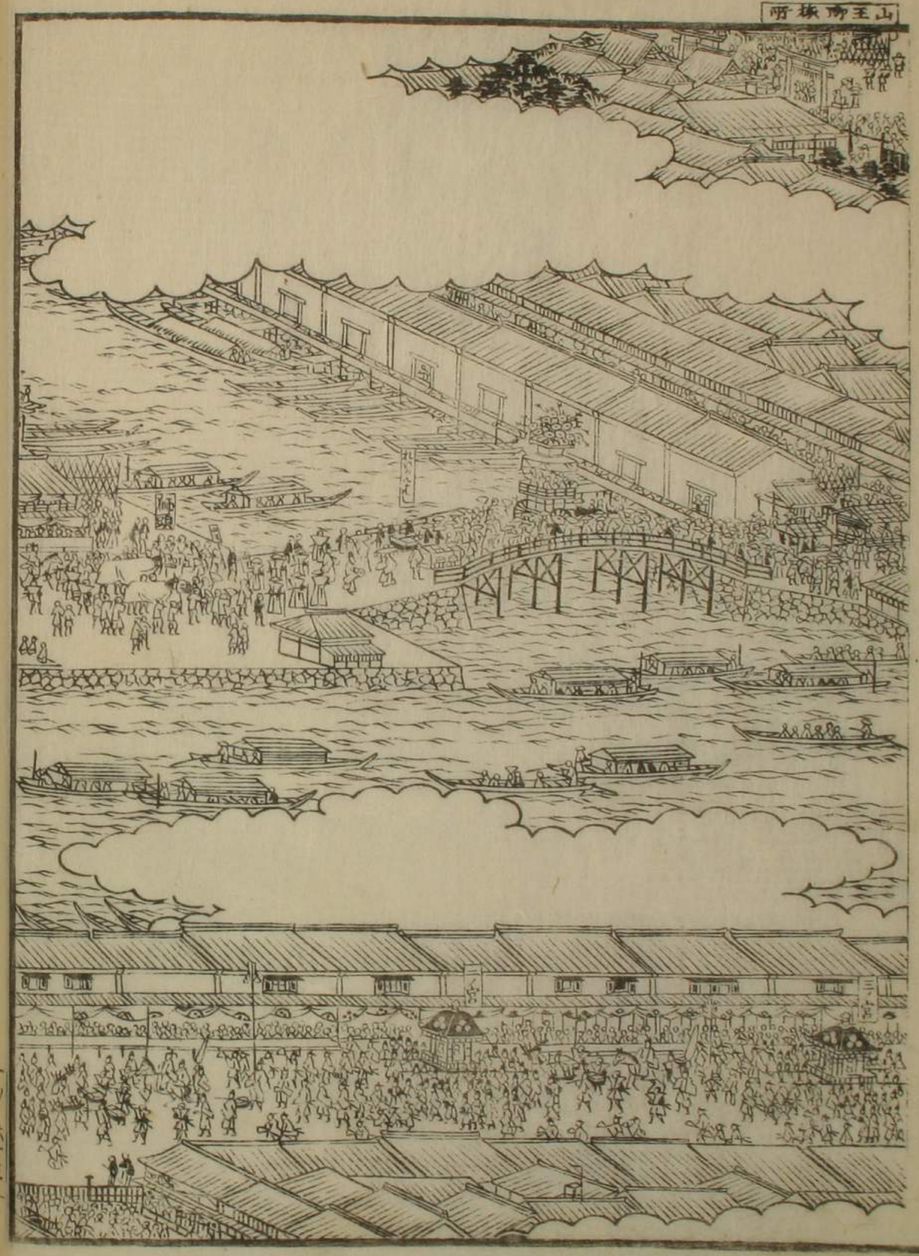
六月十五日

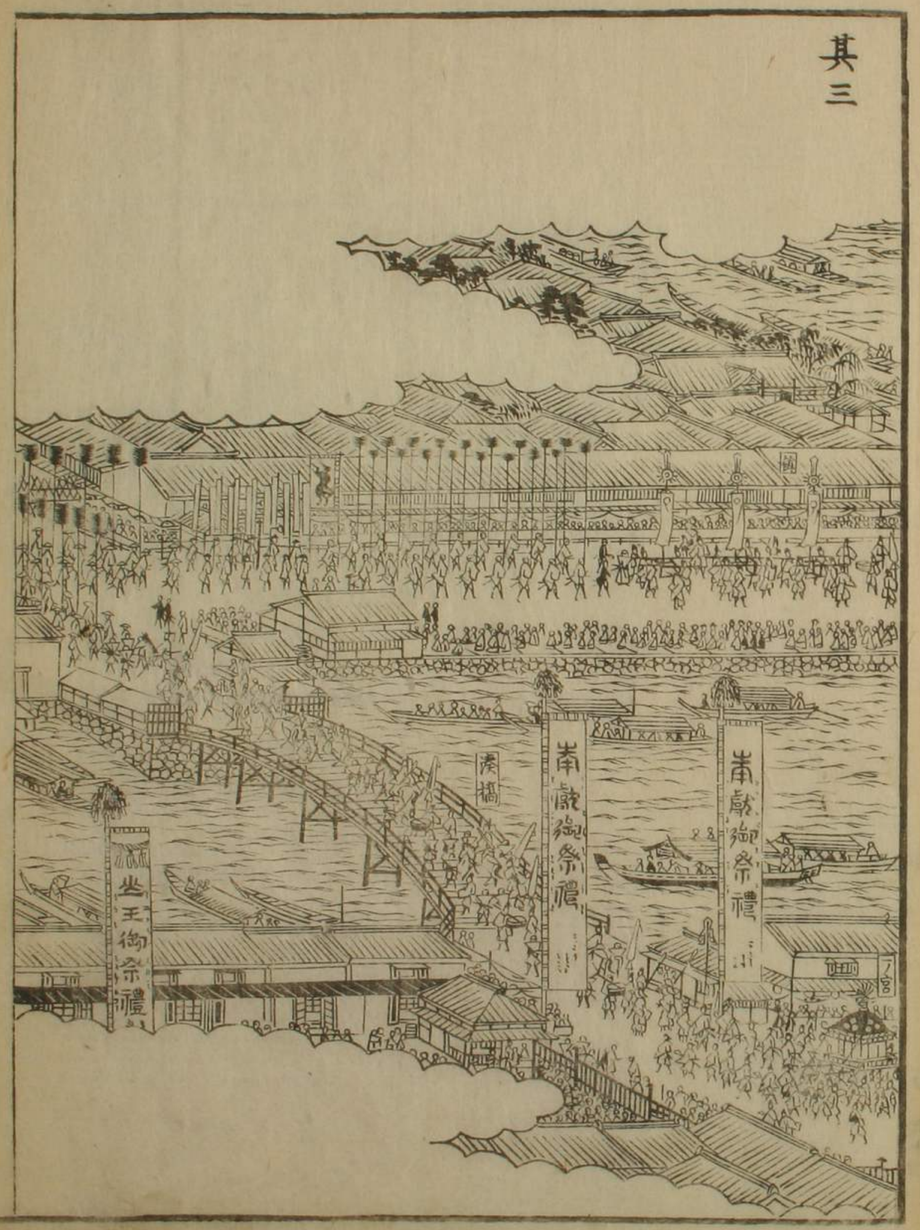
山王祭

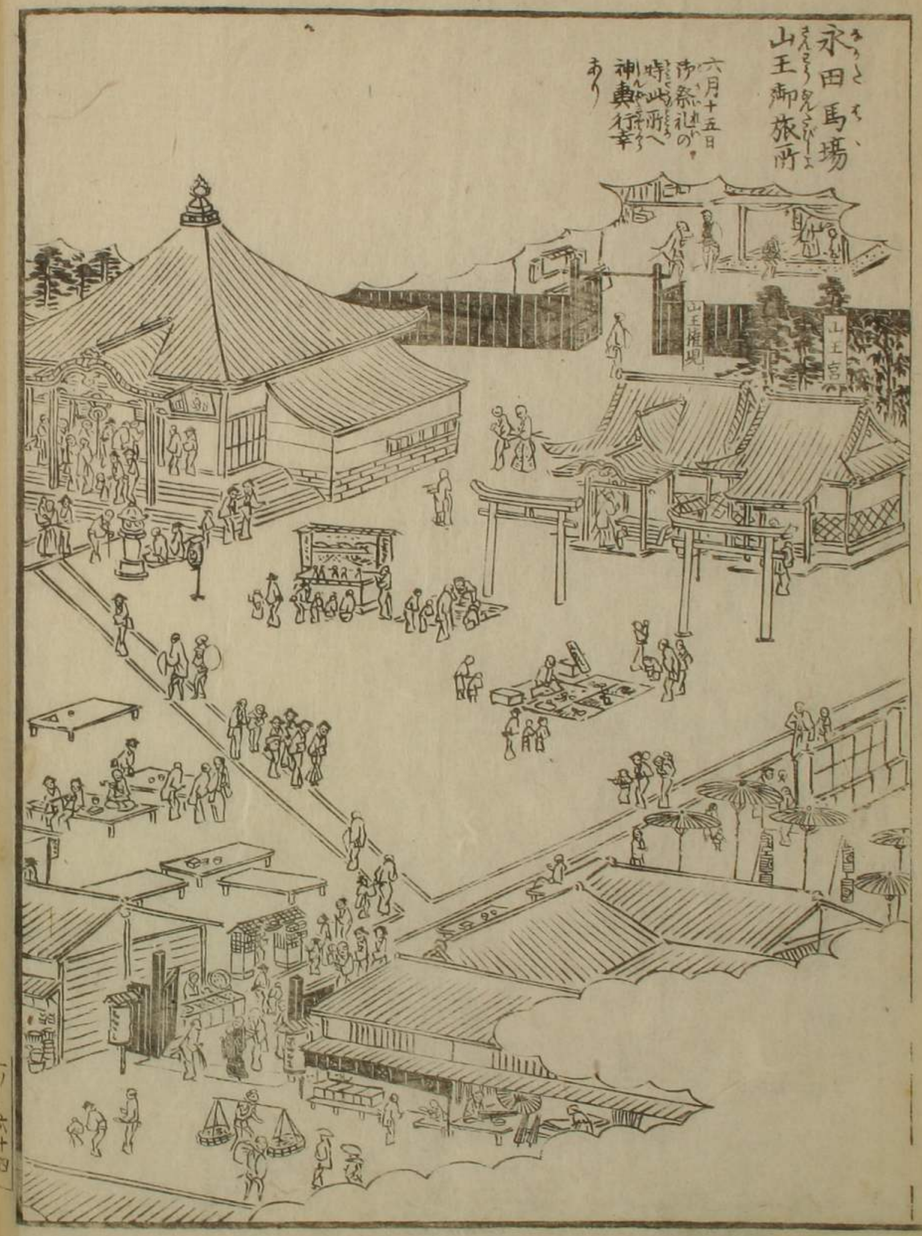


其二




山王御祭所


其三
山王御祭禮
常盛御祭禮
常盛御祭禮
湊橋


永田馬場
山王御旅所
六月十五日
祭礼の
時此所へ
神輿行幸
あり
山王宮
山王権現

茅場町
薬師堂
りきい
夜行者
豆腐屋

毎月八日十二日
薬師の縁日ハ
桂木を商ふと
賑しく来て
群集して
賑えり

祇立て別當ハ醫王山智泉院と号せ（元ハ鑑島山と号し）本尊縁起曰
恵心僧都ハ其父母大和國高尾寺の茅師佛ゟ禱く設くる
所の靈兒なり僧都佛門ゟ入く後法恩を謝せんと為自ら此本
尊を彫刻あるく高尾寺ゟ安置せしふ遥の後相州大場
村ゟ遷ト来りしも然ゟ慈眼大師東叡山ゟ来る此地や
大城の東ゟ位し来る山王此本地佛ゟ来りしふ安置ゟ
来らしとなり

天満宮　同境内ゟ社司諸井氏奉祀せ　二月八月共ゟ廿五日を祭日とせり　神像ハ画
（幅中一く寛永年間柿宮ゟ奉仕の春日局　大樹より拝受せしを山王の
神主日吉右京進ハ附与ありしを後諸井氏請得て勧請ふ）

類柑子　北の窓

我栖北隣ゟ芦荻茂く笹阿なる地あり茅場町と
名ふ昔ハ海辺なりしを今ハ業形家仏なりしく
桂現の侍桂氏と宅め堂師佛ゟ堂のかゝ牛

たくほのふ後ふかゝ
深らまひ人しかゝれハ蓼の穂ゟ立のし第木
色つきにける面ふつけも玉の表ゟ大てのゝ北
ゝもつて後に後ふかなゝ月うゝとことちゝし
宗ふゝゝゝ呼めて中畧ふゝ称ゝく岩夏ゝ
りゝす弗ゝ美ふ這如く巷をかそつも七しと
なし娘のにつたゝもあるあゝらくぬとたくゝん
ゝすあゝもゝ多しさハ切ぬものよりてゝと
ゝをそすめて　下畧

俳仙宝晋斎其角翁宿　茅場町茅師堂の辺也と云ふ往古元禄の
ゝふ住せ即後馬の地なり
按ふ梅ゝ多ゝ清ハ義せ想ゝ句ハ其角翁のゝゝゝる中普く人口ふ
膾炙せ依て平可吾ハ居宅の間近ゝ長年助ゝしむのゝ
徂徠先生居宅地　同所植木店なりとゝ先生一号を護園といゝれし

伊雜大神宮

勸進聖判職人尽
歌合の内花と獅子舞

たてもあれく
まこの
あるけふ
まん
獅子の
たゝく
鼓ふ
ぢも
ぼさつ

道遙院

護ハ萱と同し字義なれハ称せられしなりとかく此地ハ住せ
られしなり知るべし

伊雜太神宮　北八町堀松屋橋より一町ばかり艮の方塗師町代地
町屋の間にあり　當社あるあたり横町と呼へり　土俗磯辺太神宮といふ
伊雜の御神ハ天照皇太神宮の別宮なり　祭神ハ伊佐波登
美命と玉柱屋姫命二座なり　寛永元年甲子伊勢長宦出口
市正某伊雜宮より移し　まねせ通三丁目に宮社を營り
今神明長屋と唱ふ則是なり　同十年癸酉今の地へ移し　まるとなり　例祭を
六月廿六日に修行せ

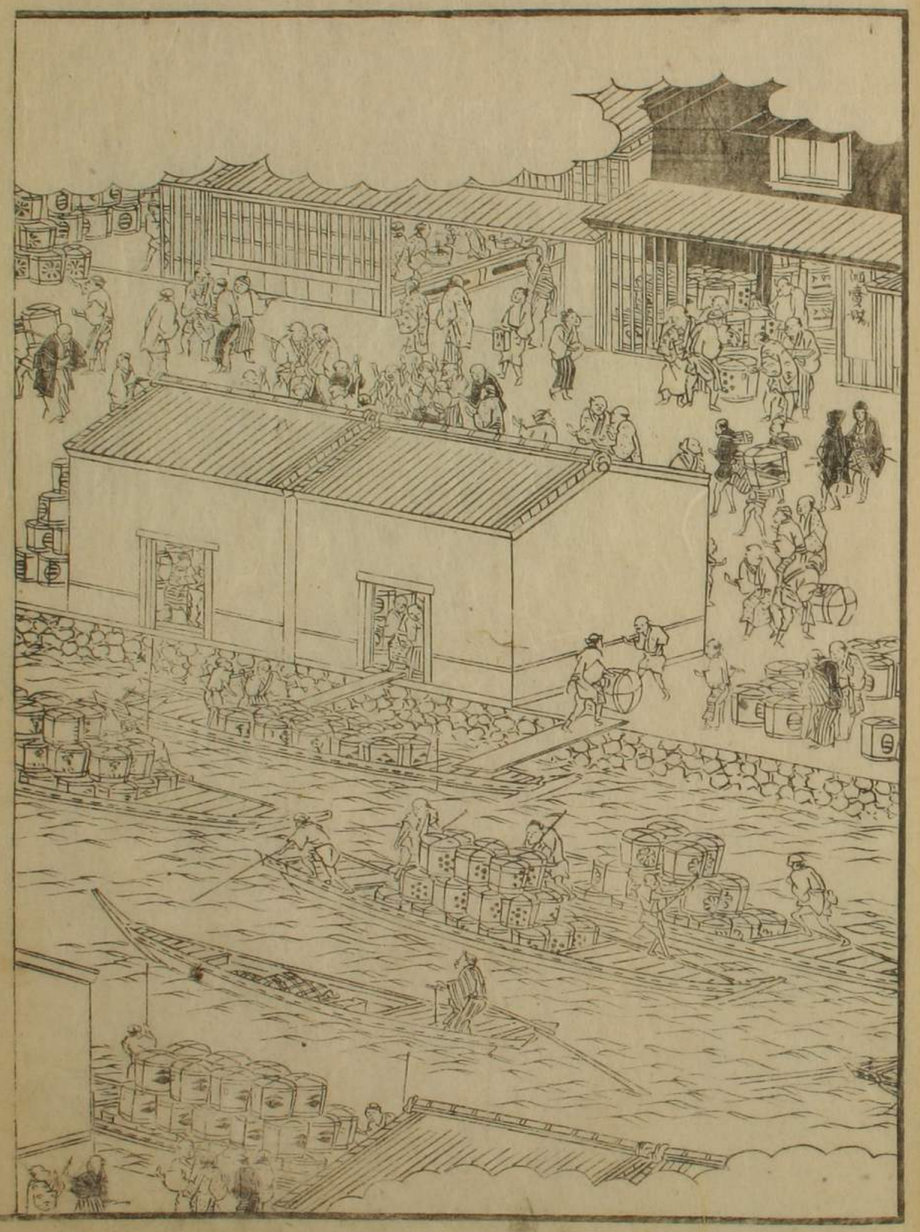
三ツ橋　一ツ所に橋を三所架せし　左ふ右の呼る北八町堀より本材木
町八丁目へ渡るを彈正橋と呼ひ　寛永の頃今の松屋町の角に島田本彈正少弼やしきありしなり
材木町より白魚屋鋪へ渡るを牛の草橋とよみ又白魚屋敷より
南八町堀へ架するを真福寺橋と号くなり

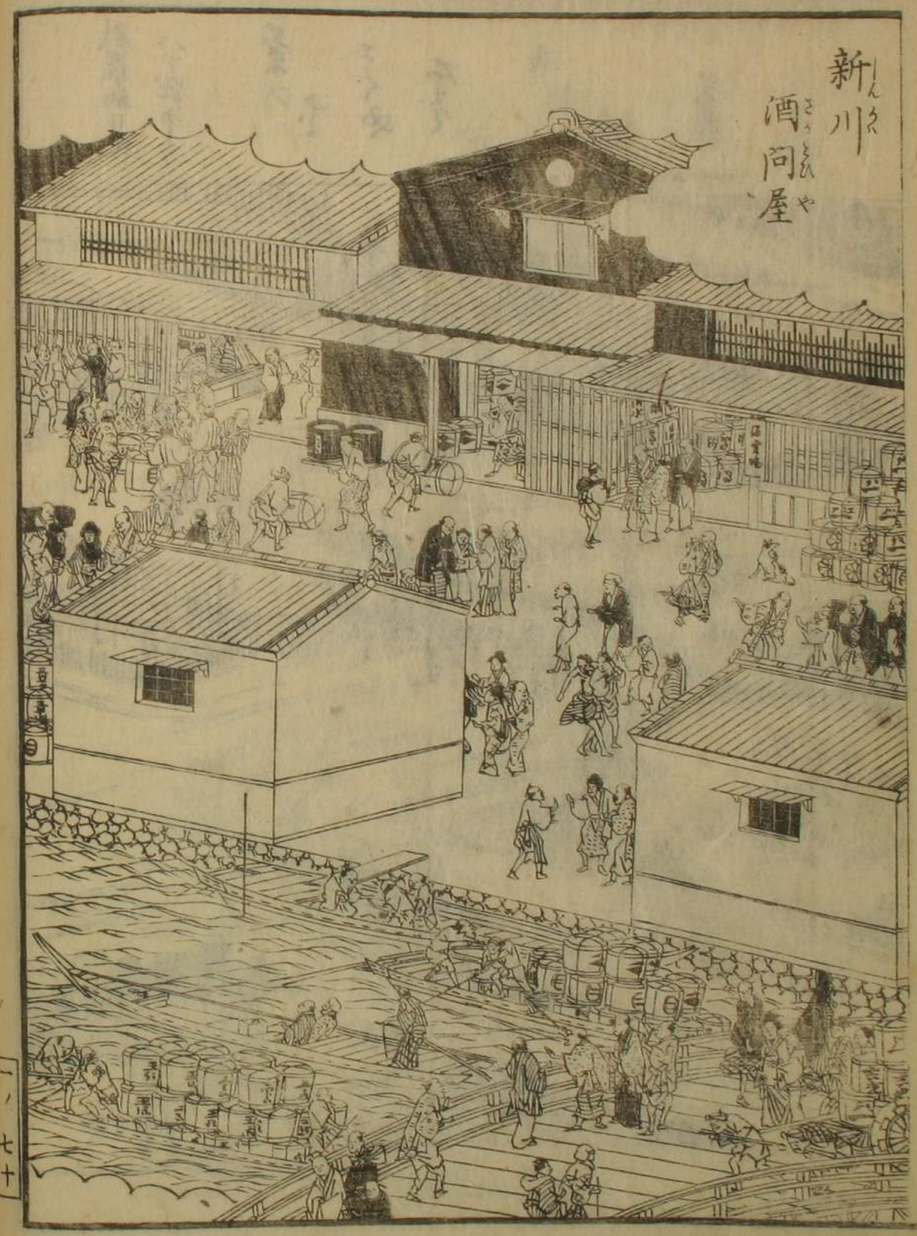
靈巖島　箱崎の南にあり　町数今十八　昔雄誓靈巖和尚此地の海
汀を築立て梵宮を營て靈巖寺と号く　依て後世靈巖島とよぶ　地名起る初ハ江戸の中
島とよひしとなり東海道名所記に東の海中へ築出し島なりと云云　後世寺を深川へ移
地をとられて東の海中へ築出し島なりと云云
されて其跡を町家となし　故に此地の北の通りより
茅場町へ渡る橋を靈岸橋と号けり

隨見屋鋪　同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありと云
此所に瀬戸物屋多く住せり故に茶碗鉢店とも号く或隨見長屋ともあり　川村隨見ハ諸國の水土を考へ
るに精しく大に世に勲功ある海を築き川を堀田畑に開
發せ河内國の水を落さんとして摂泉の堺に大和川を堀淀
川の溢を治んとして大坂に安治川を鑿　隨見自らの実名を安治と
其土砂を以て川下に新に山を築き洪水の時高波を防除む　音に呼ぶ安治川と云ふ
るをもて且沖よりの目當とす　世に隨見山と称せり　其餘の功
最少からす　菊岡沾凉云く川村隨見ハ　本名ハ波除山といふ
梵幕下川村氏の始祖なりと云

風羅袖日記
ハテ堀ゆく
菜の
ふ
さくや
石屋の
石垣
間
芭蕉

三ッ橋




新川
酒問屋

芭蕉
拝殿

新川
大神宮
弁天
三峯
富士

伊勢太神宮　同所四日市町よりあり此地の産土神とも（此所を俗唱へ新川と唱へ間口壹町余）

昌の地なり　伊勢内外両皇太神宮を勧請し遥拝所とも（江戸鹿子よハ寛永中草創とあり）　伊勢内宮の社僧慶光院比

丘尼江戸参府の折柄旅亭の儀の為より此地をかりとる（慶光院伊勢上人ハ格式御門跡並ハ比せられ紫衣を賜りて寺末印地なり）始祖の比丘尼ハ内宮建立の時より連衆と唱へ社僧なり依て内宮の神山本太夫ハ始祖慶光院の子孫なるゆへ今も彼寺の住持比丘尼ハ代々この家より嗣る

按よ明暦の江戸繪図よ今呼謂三の輪丸の地よ伊勢上人の屋鋪とあるせ一面あり此上人の旅宿なるへし後ふ此地へ移させられしなん

年山記聞云

永禄元年日記（記者不詳）後六月三日中山亜相（神官伯）被談云去月廿三日神宮（外宮）上棟無之（令沙汰）之後進殆之或比丘尼号上人（先皇市代号女房初例称号）慶光院以諸国勧進之力此上棟取立者乍内宮上棟存立ト云云雖不相應（一説世間此儀神慮有子細乎不測）

永代橋　箱崎より深川佐賀町よ掛る元禄十一年戊寅始て是を架せしめらる永代島よ架せるよ名とす長凡百十間餘あり此橋諸國への廻船輻湊の要津なり（深川の大渡船）東南ハ蒼海ゆ一く房総の翠嵐斜よ閑望美

蓉の白峯ハ大城の西よ峙筑波の遠嶺ハ墨水よ臨むそ朦朧たる

白嶺金龍の室閣ハ緑樹の蔭よ見えかくれて自丹青を施せるよ

似て風光さ〳〵画中よあるること〳〵

薬師堂　霊巌島銀町よあるも別當ハ真言宗ゆ一く医王山圓覚寺

と号す本尊ハ三州鳳来寺峯の薬師と同木同作ゆ一て（座像丈三尺ありと称し又ハ橋本薬師とも称せり）鳳来寺薬師（理趣仙人刻ものなり）此霊

大宝年間よ造立あり一しなり

像ハもと高野山橋本の里よりり一を慶長年間當寺の所基

恵生阿闍梨此地よ迁し一まるよ後霊巌寺の境内ふ安置（深川霊巌寺の

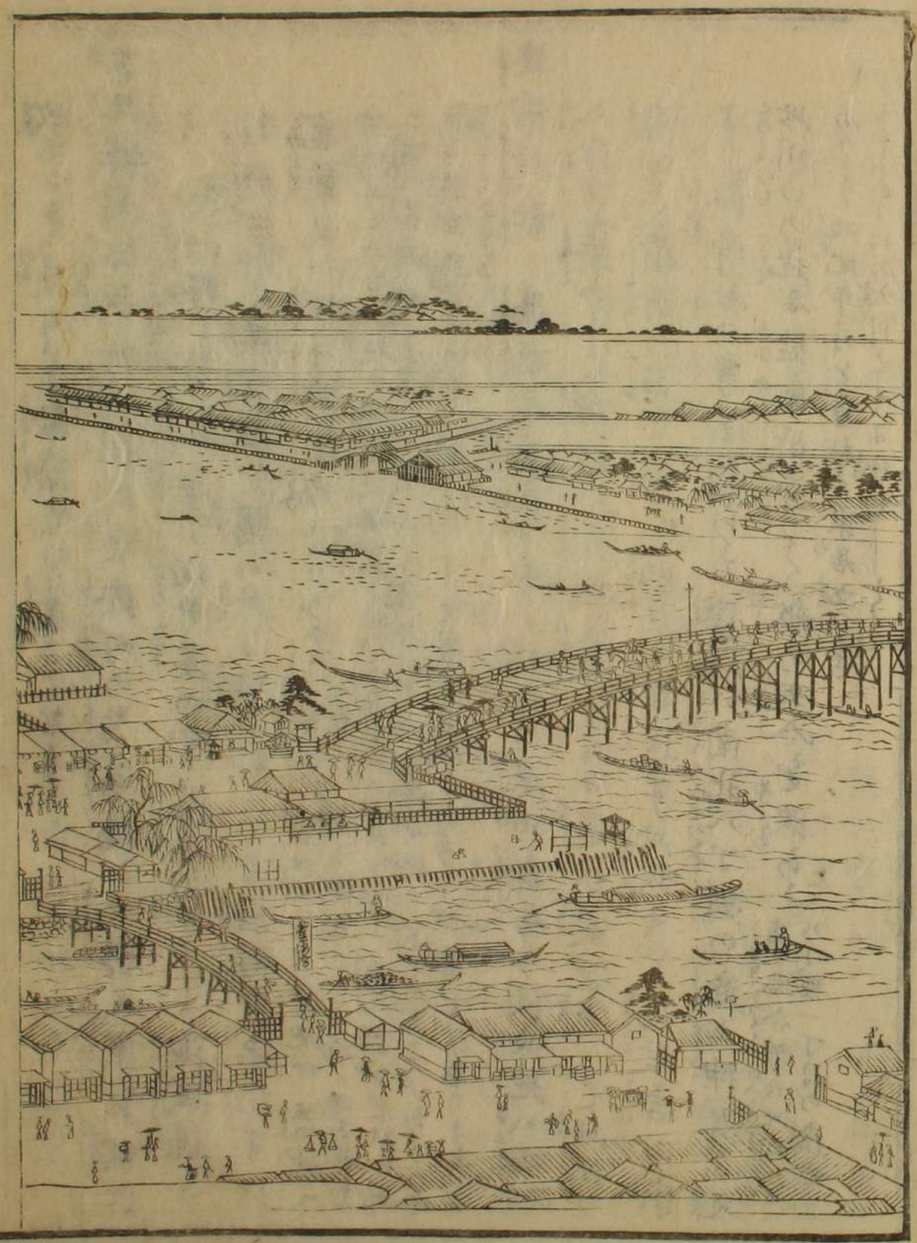
此地よあり）萬治の後霊巌寺深川ふうつる迄頃此薬師堂と

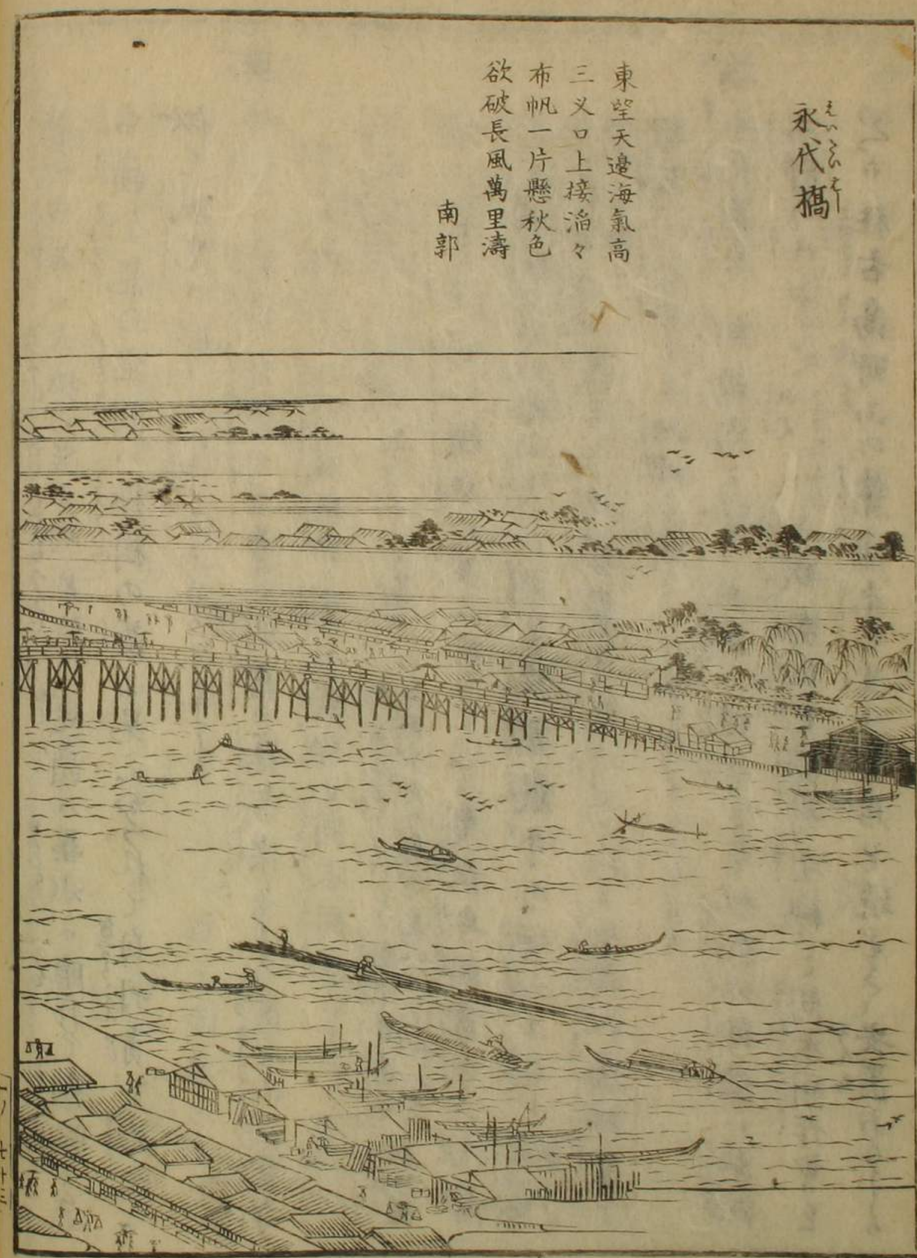
稲荷の社のみ一を此地よ残し一あらるるも

橋本稲荷社　同境内よひかり此所の鎮守ともを社記云神像ハ弘法

大師の作ゆ一て（此丈一尺二寸あり）山城國伏見稲荷明神と同木同作なりと

往古高野山の麓橋本の里よ宮居を造り一安置あり一ろ




永代橋
東望天邊海氣高
三叉口上接滄々
布帆一片懸秋色
欲破長風萬里濤
南郭

故ありて後ふ勧請なしまるとなり

恵比須前稲荷祠　同所東湊町の南高橋の北詰人家社間にあり　別當八天台宗にて昔ハ向井矣のやしきふあるしの海賊橋より音門院と号す　引移られし頃宮居を構の外ふ出されしとて此所をろひすれ宮前又ハ蛭子前と唱へ来るも　古老云ふ此地より鉄炮洲築地へ出洲のみあり此辺の洲ふ芝海老といふもの多く集る先ふ漁人字ふえびの洲と唱へ其洲崎よりしら稲荷の宮をうつして海老洲の宮とのこしよひあるいハ也　後世誤りて蛭子神ふ混し又夷子ふ誤しいふ附會せしありとそこの説ふもありあん

湊稲荷社　高橋の南詰ふあり　鎮座の来由詳ならぬ此地ハ廻船入津の湊ゆゑ諸國の商船普くこゝふ運ひ碇を下しそ此社の前ふ多く積所の品を悉く向屋へ運送す此故ふや近世吉田家より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又此川口の北ふ監船所あり　船の出入を改らる事監合考云此祠昔ハ八丁堀一丁目の南岸ふあり　それハ八丁目の大川なりふ迄せしとそ

鉄炮洲　南北ハ凡八町ありて傳云寛永の頃井上稲富ふ大筒の町見を試しふなりと或此洲の形状其器ふ似る故の号ありともいふ　白石先生の説ふ此地ハ明暦火災後ふ築山伏を傷某を奉行として築しものなり又故家珍蔵の舊図ふ新洲と記せり　今ハ薪炭石材の問屋多く住せり

半井ト養翁居宅地　同所明石町の裏通ふあり　半井ト養敷八父ト養の時賜ふ云云寛文江戸絵図ふ十間町の西の裏通り寒さ橋の東詰の北の方川ふ傍る角ふ記してあり　武人云延宝九年半井ト仙拝領屋半井ト養翁ハ東都の醫官ふして壮丹花肖柏の裔孫なり連哥ふひ狂歌を能せる此地を賜ふり頃の口まねふ

ト部ハ本道ふて思ひふ入れ科りをう

按ふ江戸砂子ふト養の詠るふ如く不審ふ思ふ哥意ハ他の人の詠るふ如く不審ふ思ふ

了然禪尼菴室地　此地ふ住まりて紫の一本とのる草紙ふ禪尼の行實ハ第四巻落合泰雲寺の条下ふ詳なり

佃島　鍜炮洲より傍らに孤島をいく舟松町より舟渡あり　文亀年間江戸の舊國より向島とあり　天正年間

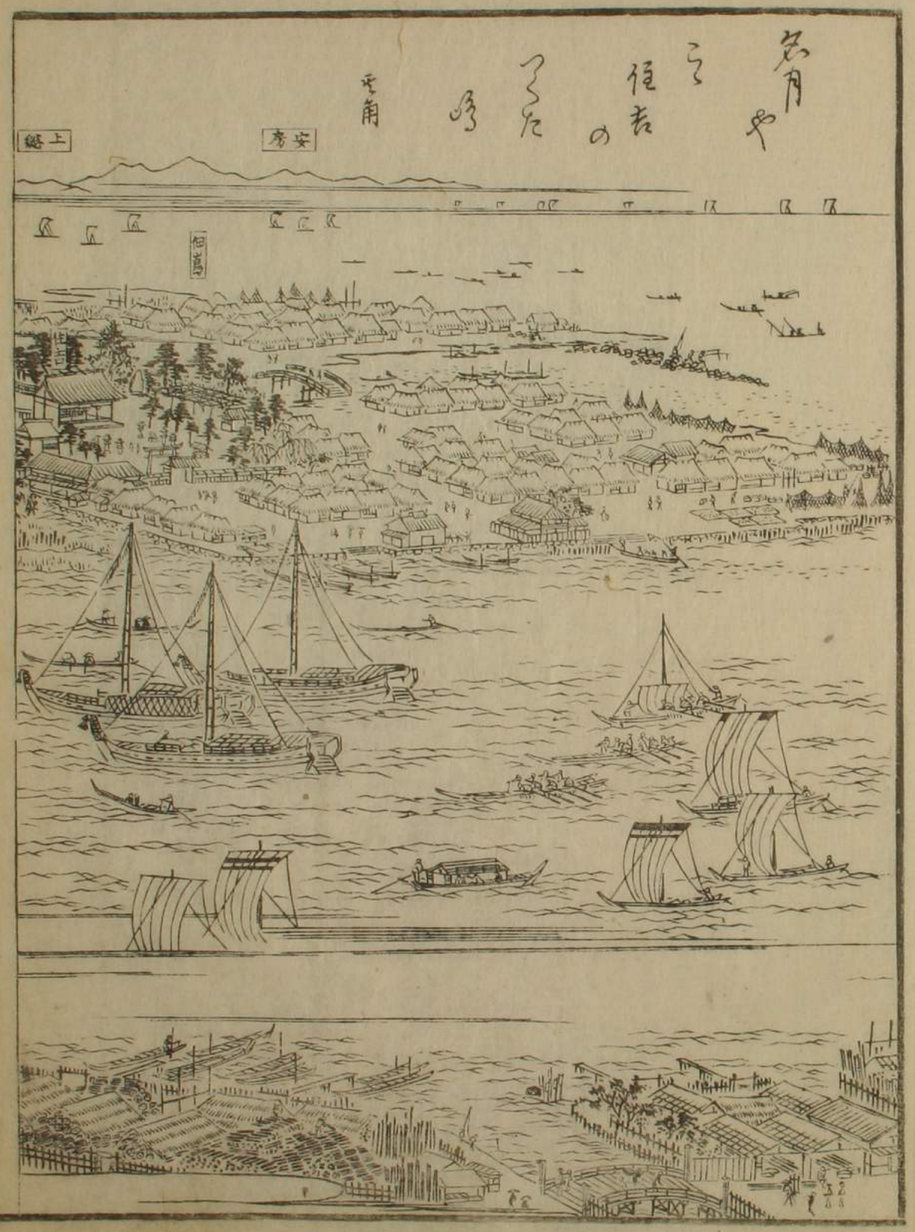
東照大神君遠州濱松の御城ゐまりしく皇都へ上りなふ須摂津國多田の御廟坊より住吉大神よまりて神崎川渡船なりてしゐ佃村の漁父獵船をこぎ出て渡しなりしハ伏見御城ゐまりしなを時も御膳の魚をなるべき旨　台命あり又西國へ使なるの折ハかるべ漁船を以て仕へなるべきて旨　命ありしハ大坂両度の御陣も軍吏の密使或ハ御膳の魚獵等のの日く怠なく仕へまりしハ後漁人三十四人江戸へめされ慶長年間浅草川渡遊獵の時網を引せるゐ同十八年八月十日海川漁獵をへき旨免許なるべり（其頃迄ハ安藤石川両侯の藩邸あり）（則ハ今の小石川網干坂小網町難波町ハ旅宿居りしとあり難波町より今も六人川岸と云所ありしく六人網と号けて用ひるとあり）然よ寛永年間使炮洲の東の干潟百間四方の地をのり正保元年二月漁家を立並へて

本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取くまるつき旨　台命よりく毎年十一月より三月迄怠らずまる其間ハ他の獵を堅く禁めるべ猶深川八幡宮の前ゆく空地三千坪をのりく佃町と号けらも漁菜魚をもまるる

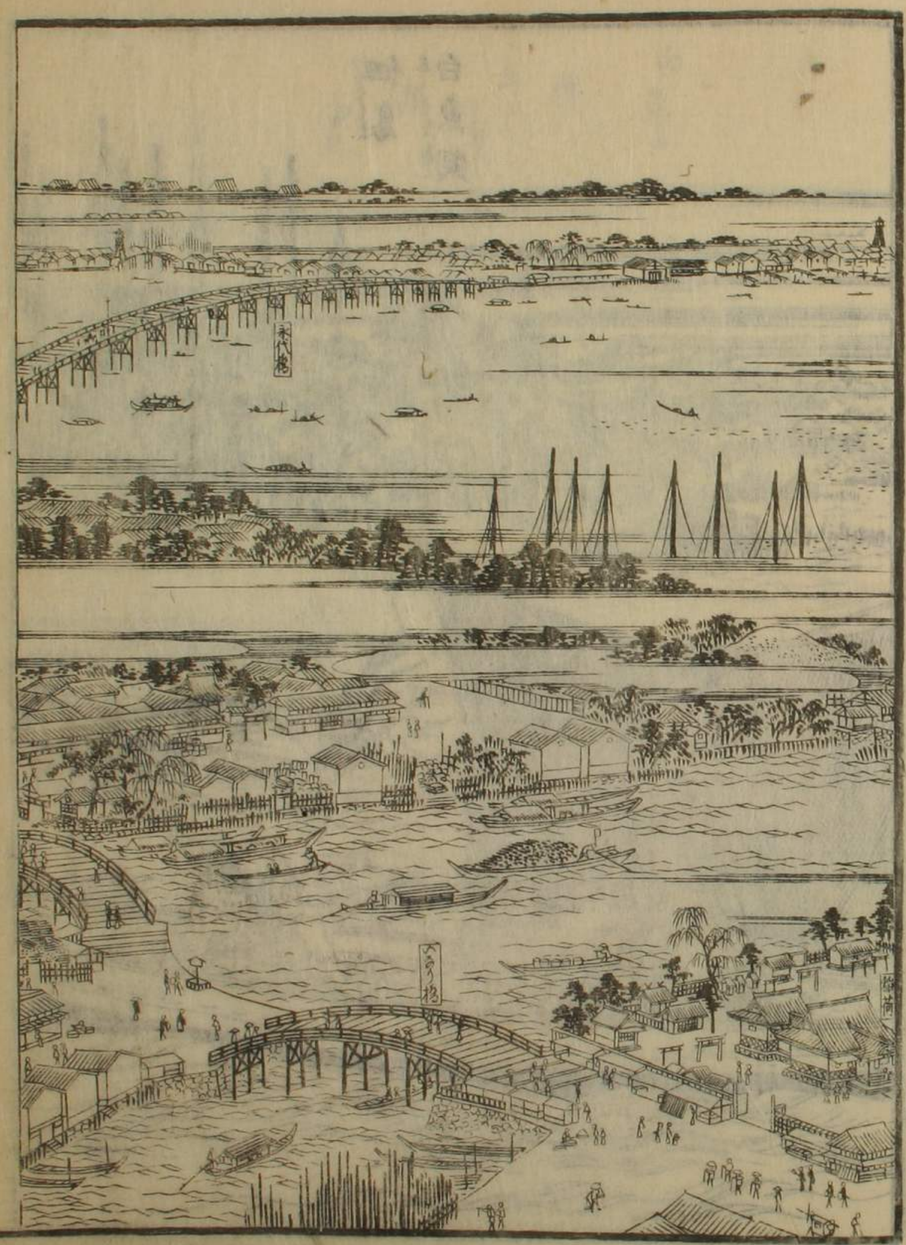
（或人の説よ此所ハ始安藤右京進やしきの地ゆしく住吉の社ゆとなれて頭よ繁茂の藤ハ安藤家ゆく栽ゆ植ありといり廣貢よ佃島ハ紀州賀多の漁人雑居し　此地ハ殊更白魚よ名あり故よ一島皆本願寺宗おく他宗なしと云）

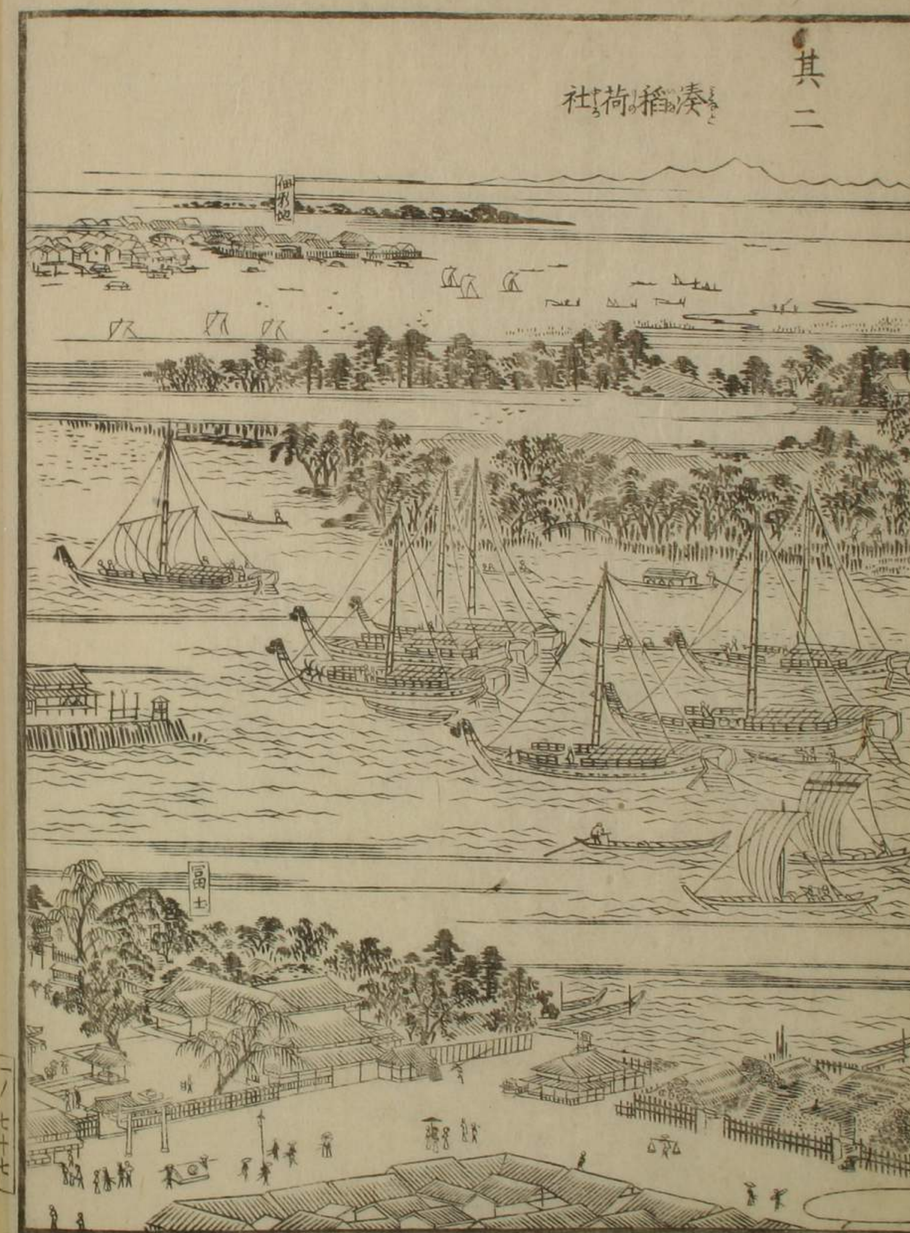
冬月の間毎夜漁舟よ篝火を焼四手網を以く是を漁まり都下坊るへく是を賞せり春よ至ま二月の末より川上よ登ま弥生の頃子を産を其子秋よ至く七八月の頃江海よ入と云事監合考よ云両國の川筋よ産ゆの白魚ハ尾州名古屋の浦よりとあせるの

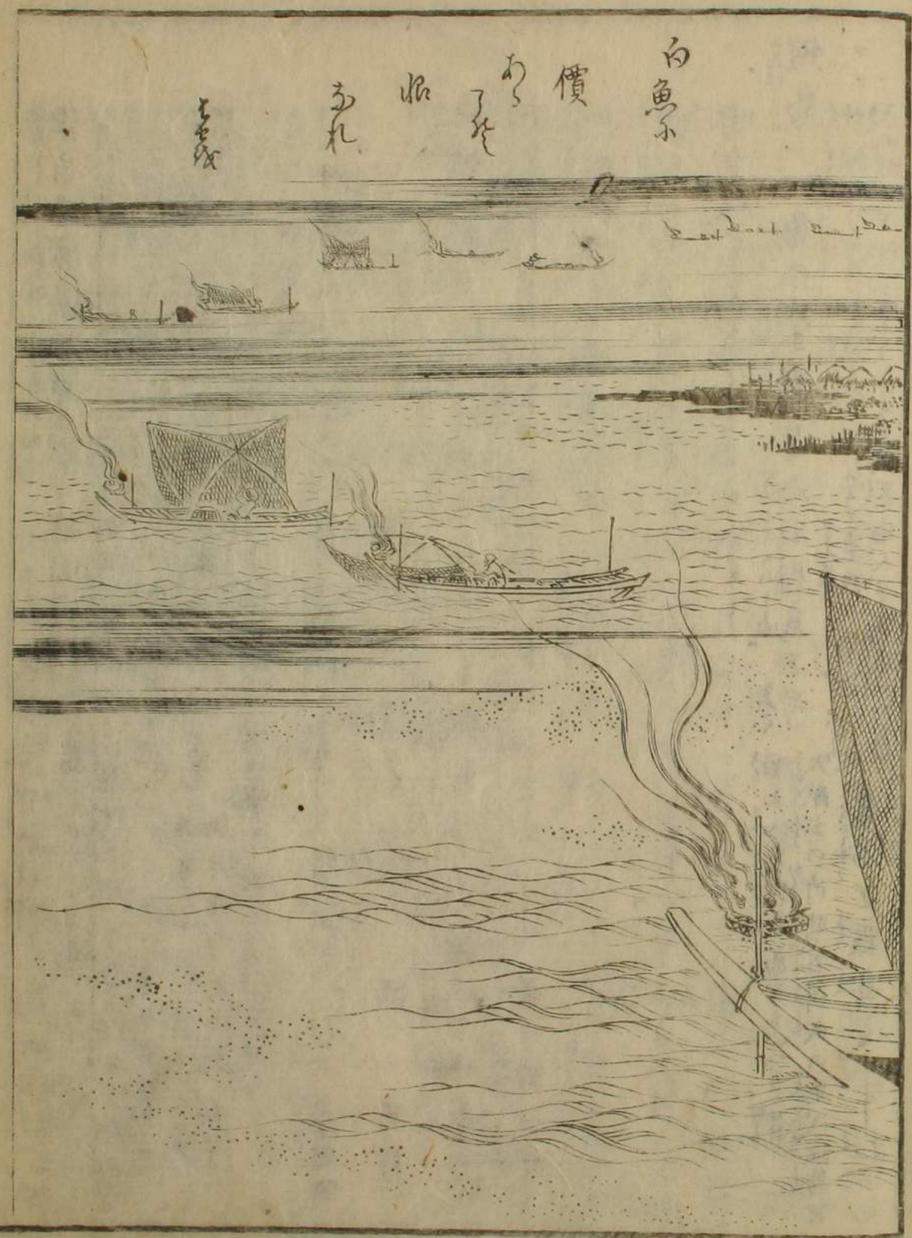
住吉明神社　佃島よあり祭る神摂州の住吉の御神よ同一神主ハ平岡氏奉祀を正保年間摂州佃の漁民よ初く此地を賜りしよりこゝふ移り住本國の産土神なるゆ分社しくあふも

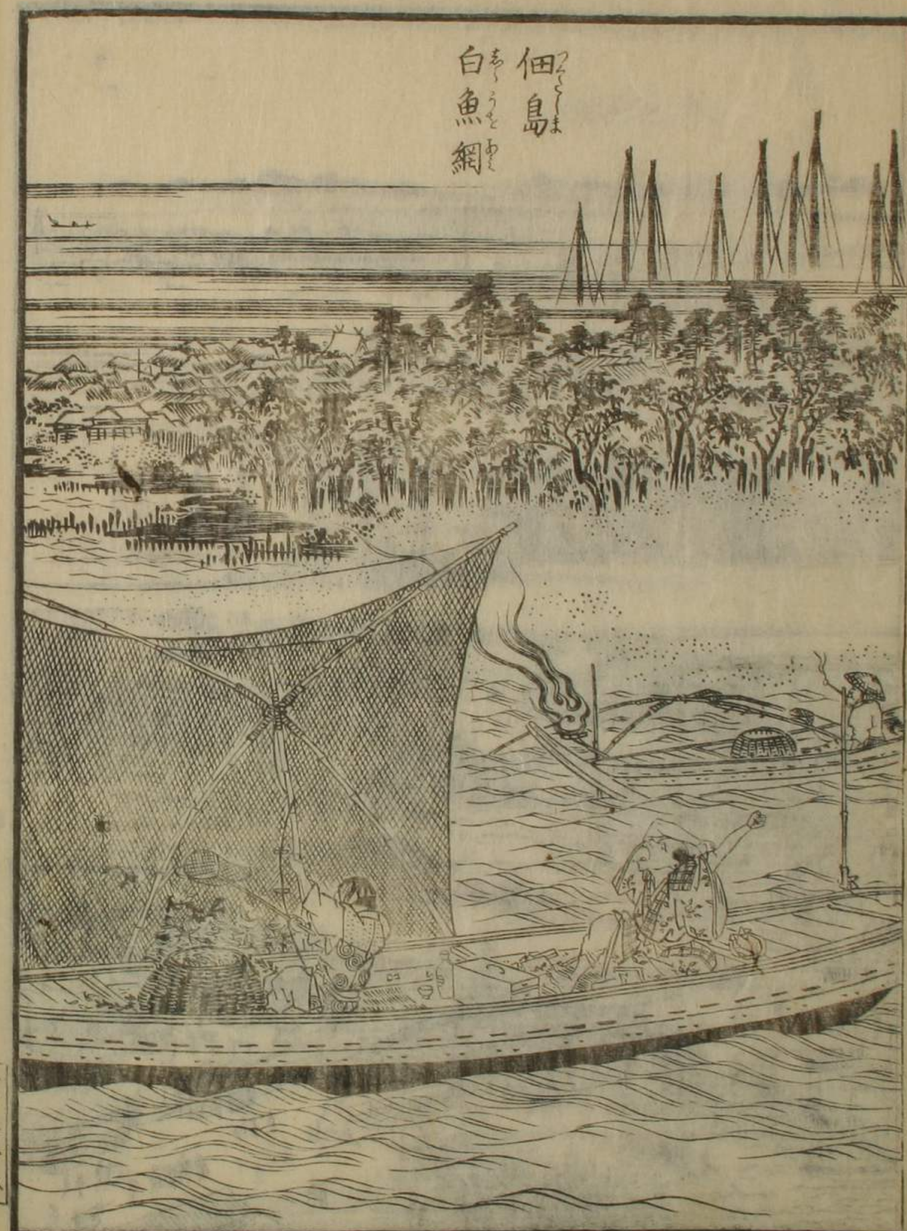

上総
安房
佃島

佃島
住吉明神社




其二
湊稲荷社
富士


白魚小價あるなれば


佃島白魚網

住吉の宮居を建立せしとなり摂州の佃村ハ西成郡にあり古今集にたかの島とよめるハ是なり

住吉明神の宮居あり神功皇后三韓征伐の帰陣の時ここに船の鬼板を埋へいのき祭るとかの島より己降佃村の地に船の艦綱を分社ありと

道遥院実隆公住吉に詣納和歌十首の題を詠てありし中に

江上月

此浦の入江に月のみなれをるとく紫秋のくも　富茂睦

海月やうら住吉はたくしまの　廿角

此地ハ都下を去る咫尺なるとゝ離島ゆゑ漁人の住家の所得顔なり弥生の潮乾て貴賤袖を交へて浦風に醉を醒し貝拾ひあるゝ磯菜摘あんと其興殊に多し月平沙を照し

漁火白く芦辺の水雞波間の千鳥も共に此地の景色に入りく四時の風光足もとゝ

鎧島　佃島の北に並へる今石川島と号

俗に八丈島と号ク昔鎌倉大献公の時石川氏の先代此島を拝領唱ふ寛政四年石川氏永田町へ屋敷替ありしより炭置場人足寄場ふゝ

舊名を森島と云ふ江戸の

古図に記て云く此島一名を鎧島と号く古へ八幡太郎義家朝臣鎧を収めく神體とし八幡宮を勧請す石川大隅守居住の時ハ其庭中にあり今ハ鍜炮洲稲荷境内にありと云云

古図文亀

又其図に

或人云昔献廟の浦時異國より鎧一領を持来る是を持ものあるとし時石川氏の祖大力あり宅地にたまをなり鎧を携へし賞とし

大樹の御前へ披露なし感賞のあり此地を

の地なれハとく鎧島とハ号け

江風山月楼　築地稲葉侯別荘の号なり寛文二年壬寅の春此所の海汀を填ミ土を積石を畳むて翌る年の秋其功なりと

いゑ風光他に勝れ殊に洞庭の秋影ゆを越ふとなり

咳逆著姫　同藩中にありいつもさ二尺ばかりの石像なり稲葉侯の始祖小田原にあり一時平辺を巡見せられしとある深山に入ふ

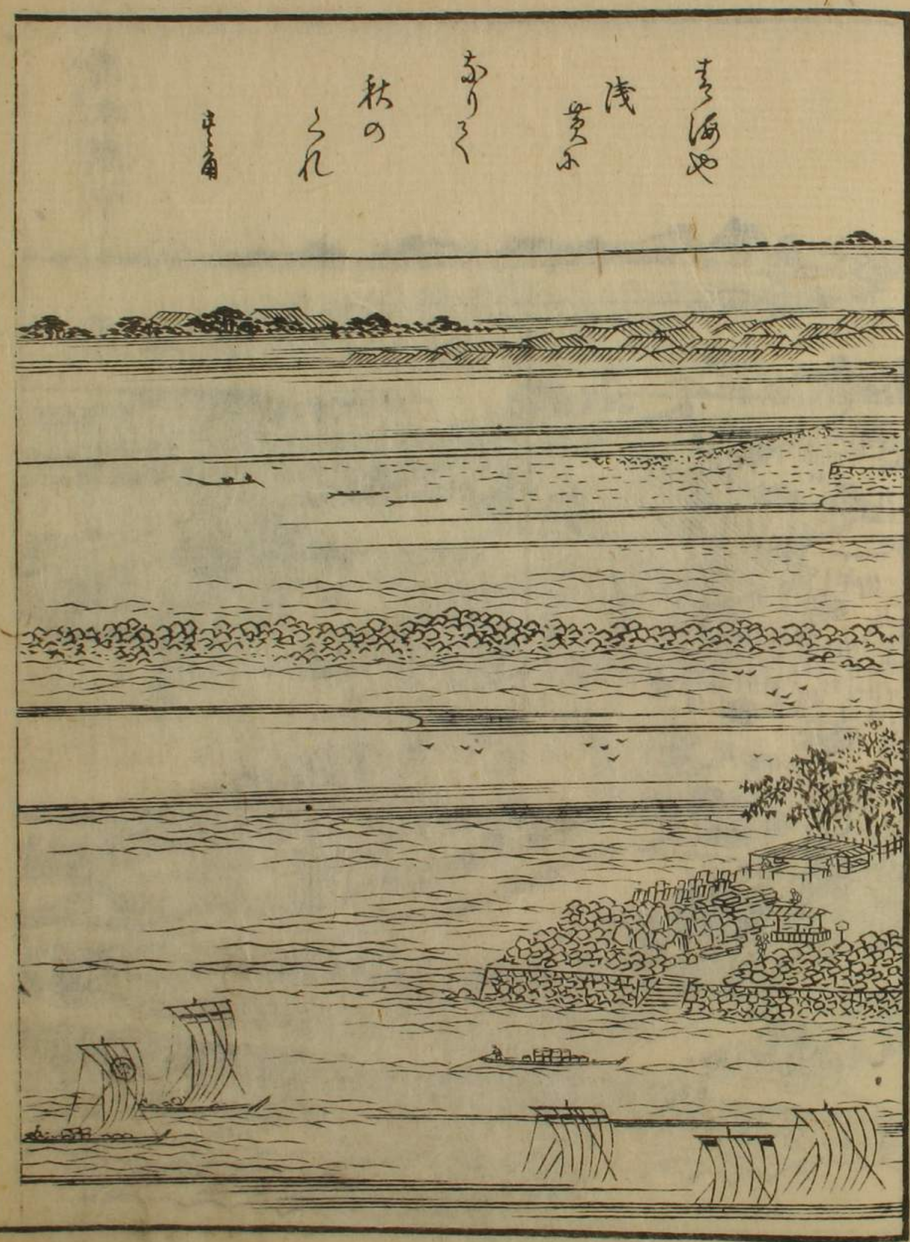
一の草庵に一人の老僧の住るあり平の号を風外と云と後是を城中に請せんとなる

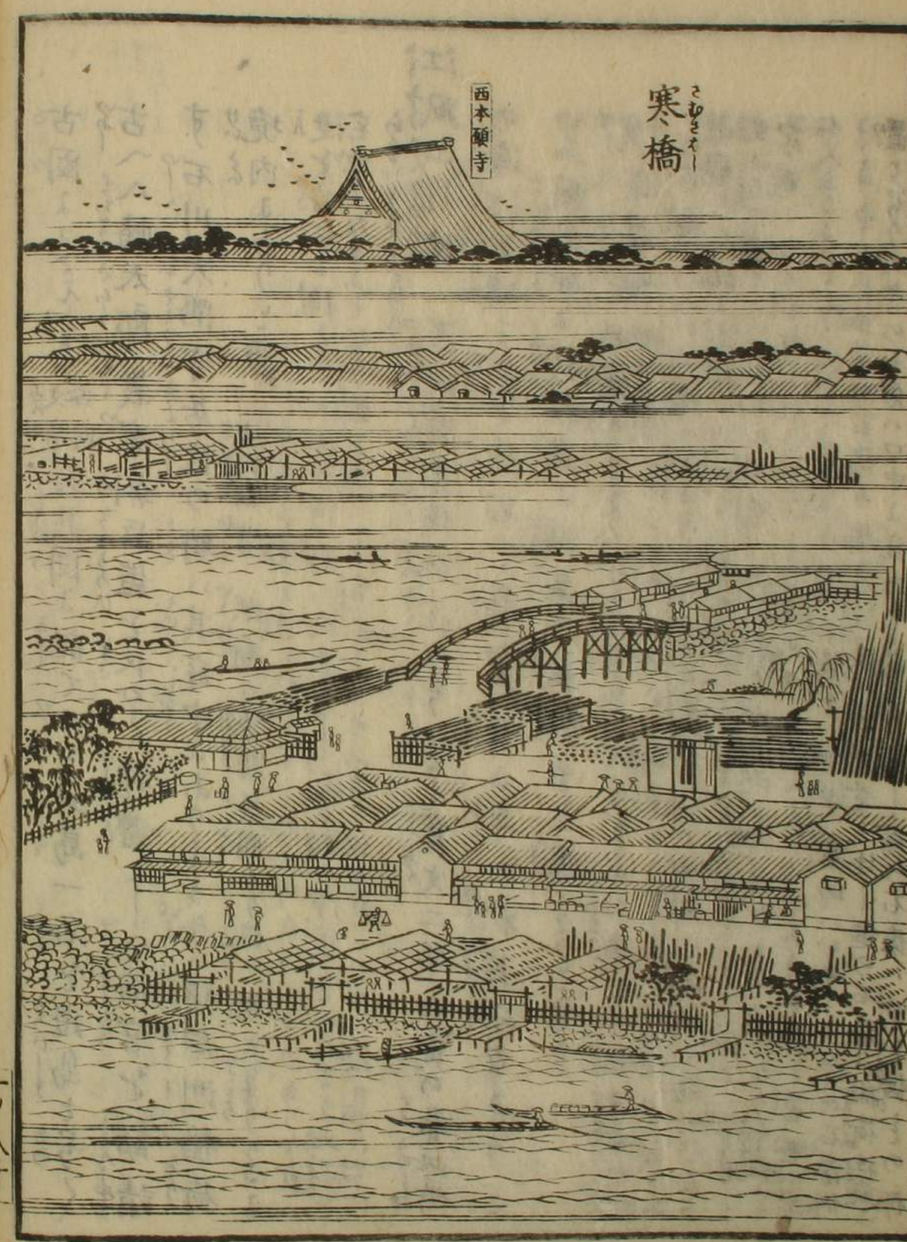
髪の故に平後一度城に入来て城主に見ゆともあくまでこゝろこゝにせも受るなの種ハ家臣田崎某に許に置く出去終に行方をしらずとなり住ち

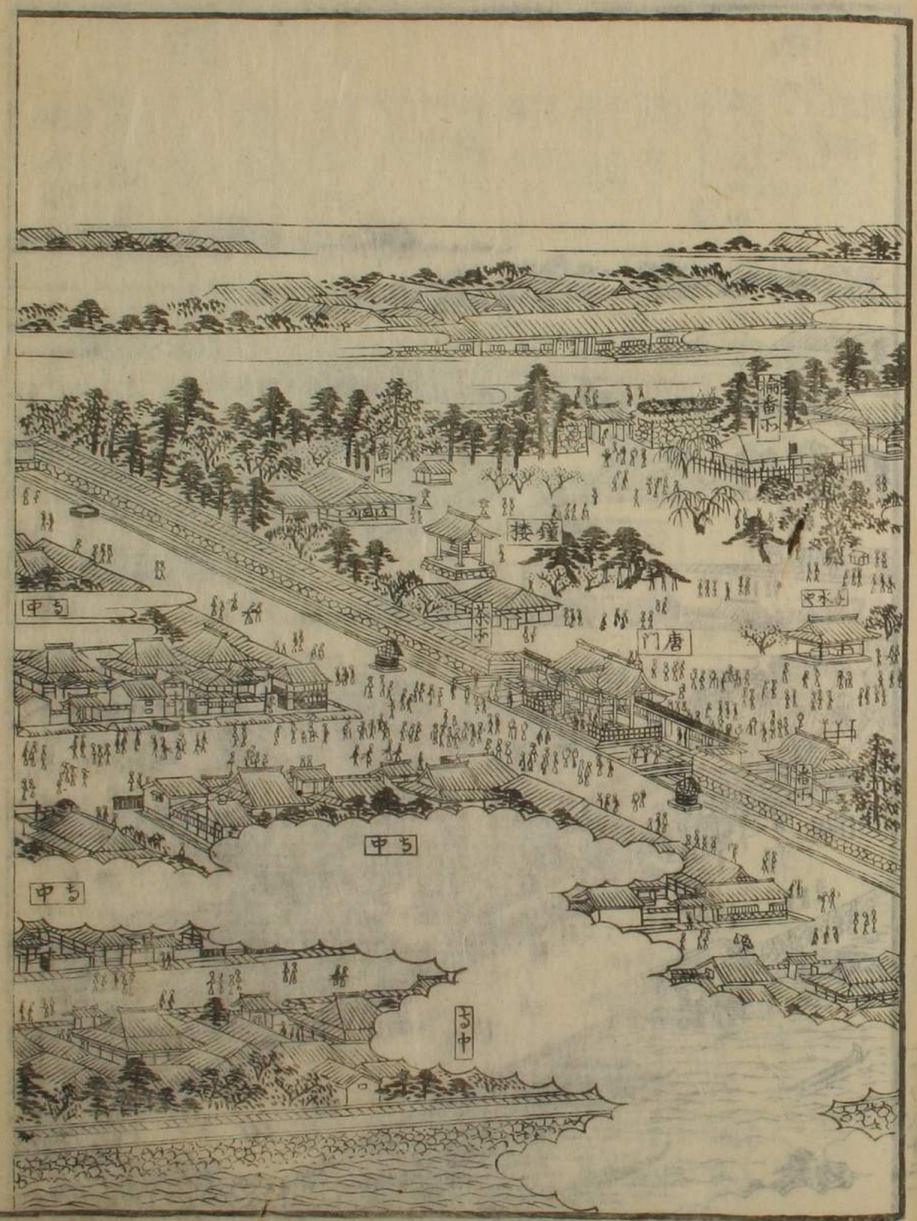
平の庵に件の石像を残してありしを後此地にうつされしとなり

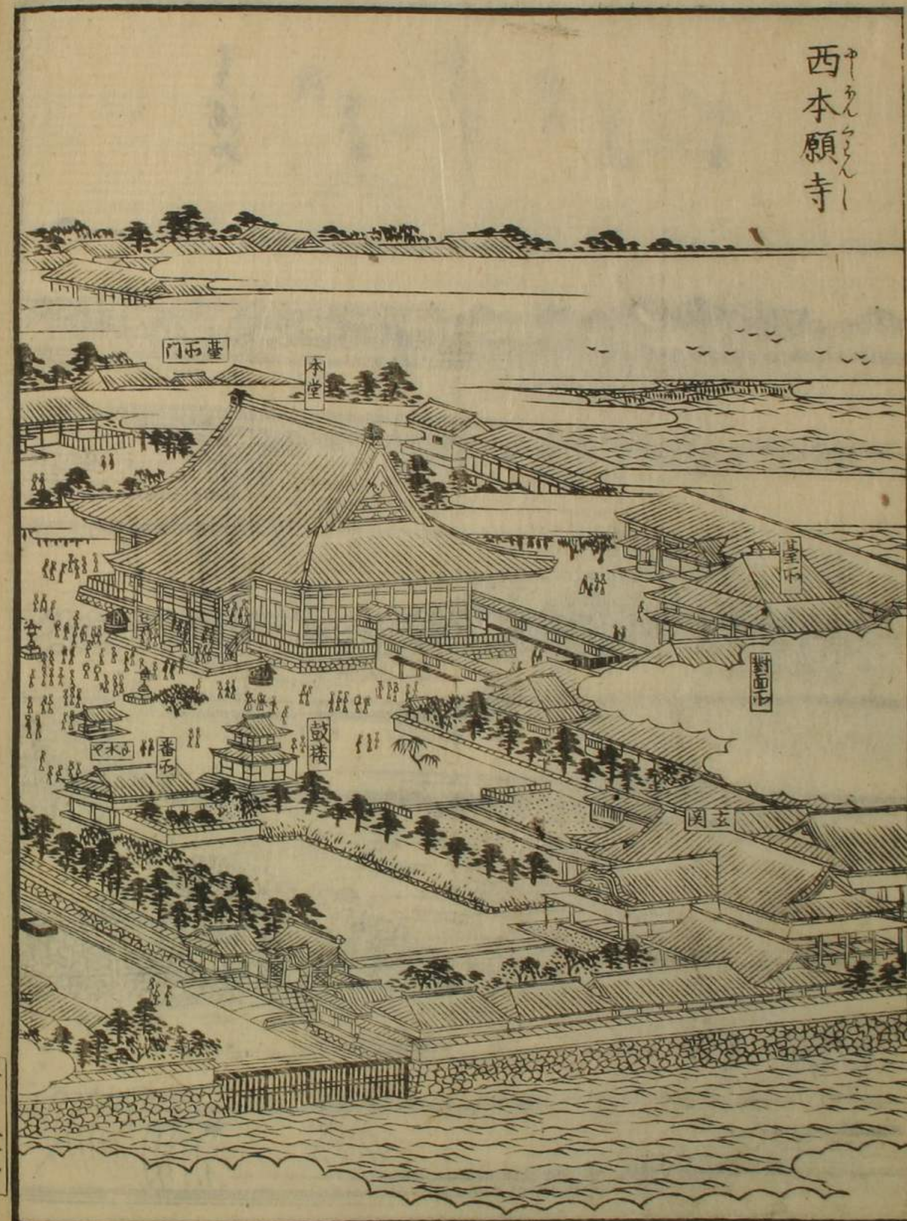
行人あるゝを以て依著の石像を一雙並へ置時ハかるゝ者の石像倒置となり又著の石像ハ口中に疱あるゝの寄願し姫の石像ハ咳を慰とのの祈

堂に迄し姫の石像ハ稲荷社に稲葉侯累代の


まつ海や
浅
夢ふ
ふりく
秋の
くれ
芭蕉


寒橋
西本願寺


同番所
鐘楼
唐門
中ち
中ち
中ち
中ち


西本願寺
門西臺
本堂
臺所
對面所
鼓楼
番所
玄関

願寺霊験あるところなり

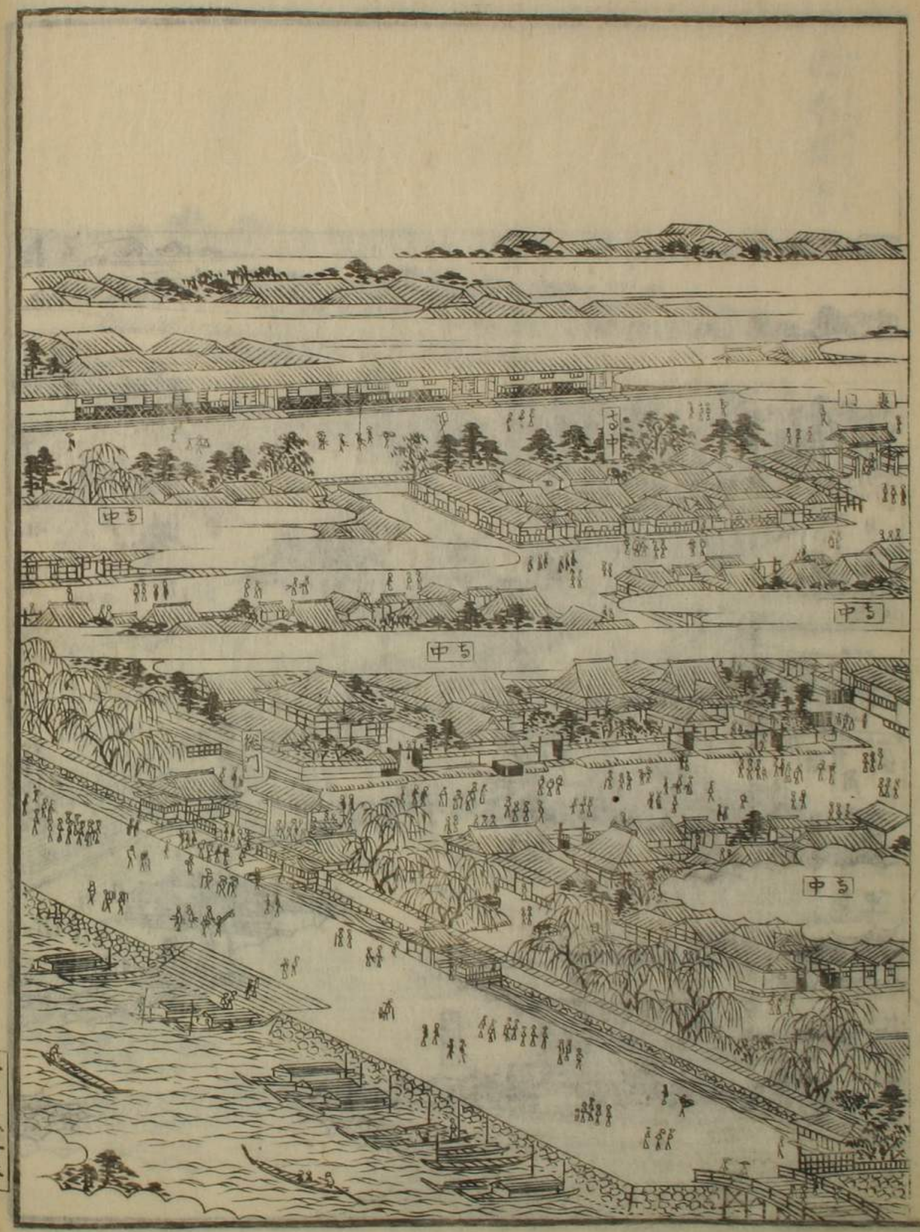
西本願寺　同所川を隔て北の方よりあり俗よ築地の門跡とゝなへる

或人云此地ハ明暦四年お仰のすあるゝ築所なりとゝなへる　一向汎ゝ京都西六條より輪番所なり　宗祖の遺を塔頭五十七宇あり始横山町二丁目の南側方といゝ

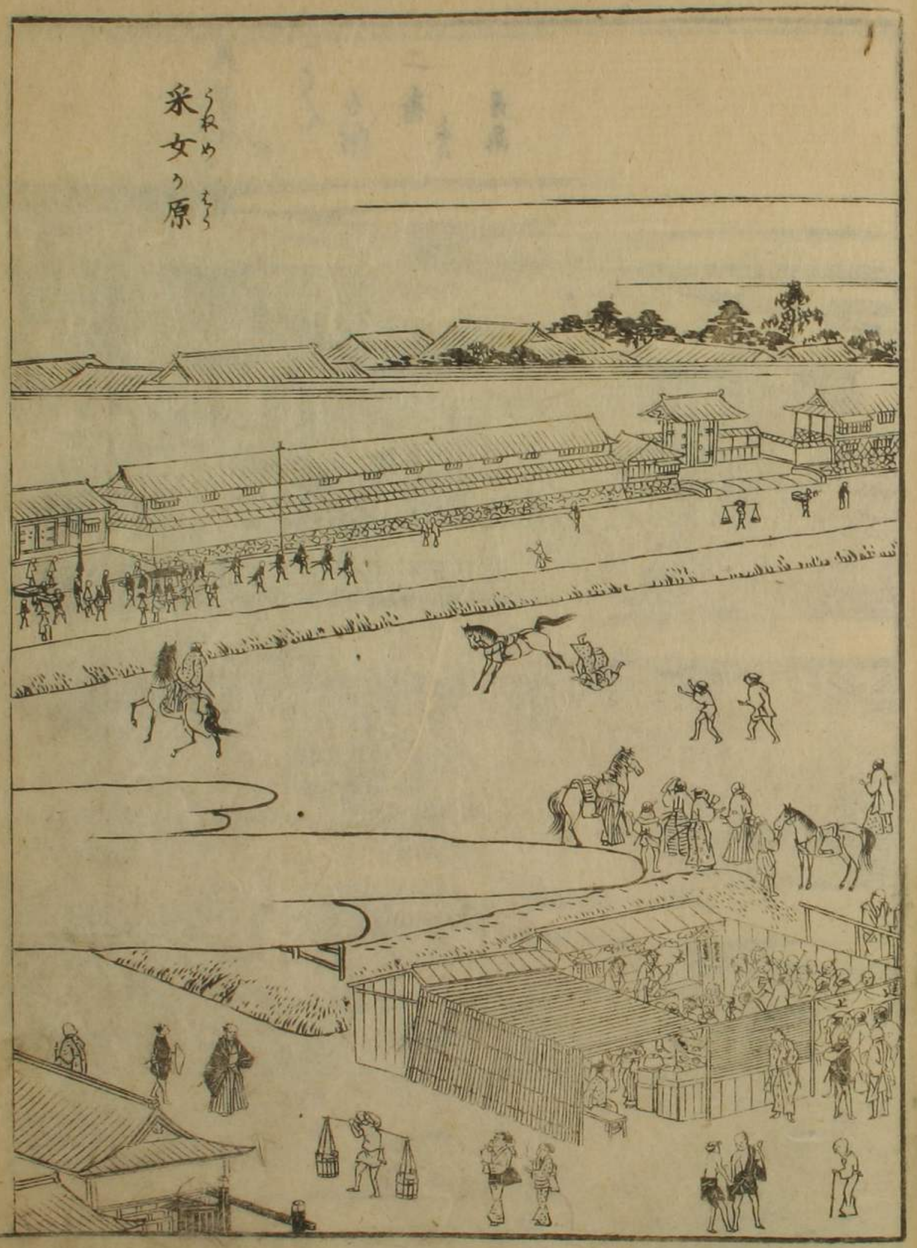
巣通りふのをしを明暦大火の後此地よ移さる准如上人を當寺の開祖とも　江戸名所記よ　神祖御在世の時京都西本願寺の末寺と立られ宗流を汲華を飾らんと云く白石先生云く善養寺ゝ一向僧東本願寺の建立を云へり　和漢年契よ延宝八年庚申西本願寺立あり　本尊阿弥陀如来も聖徳太子の彫像ゝゝ泉州堺の信證院よりゝゝ　毎年七月七日立花會十一月廿八日開山忌ゝ七昼夜の法會修行あり是ハ報恩講と云又俗開帳講と称ス

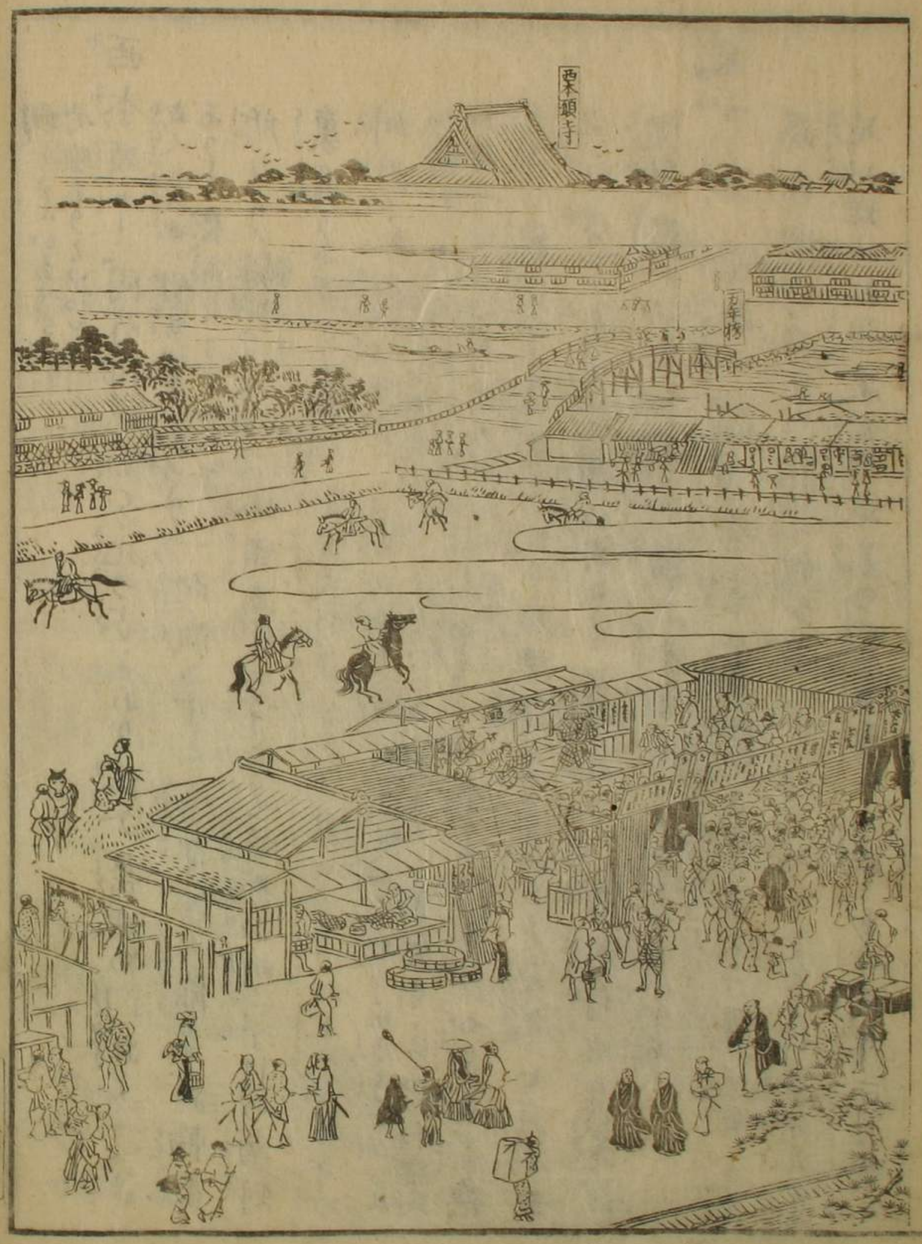
采女ヶ原　木挽町四丁目より東の方此所よ馬場あり常よ賑しく講釈師浄瑠理の芸人軒を並ゝ芸人の足をとゝむ享保九年迄此地よ松平采女正定基のやしきあるゝ故ゝ同年四月晦日

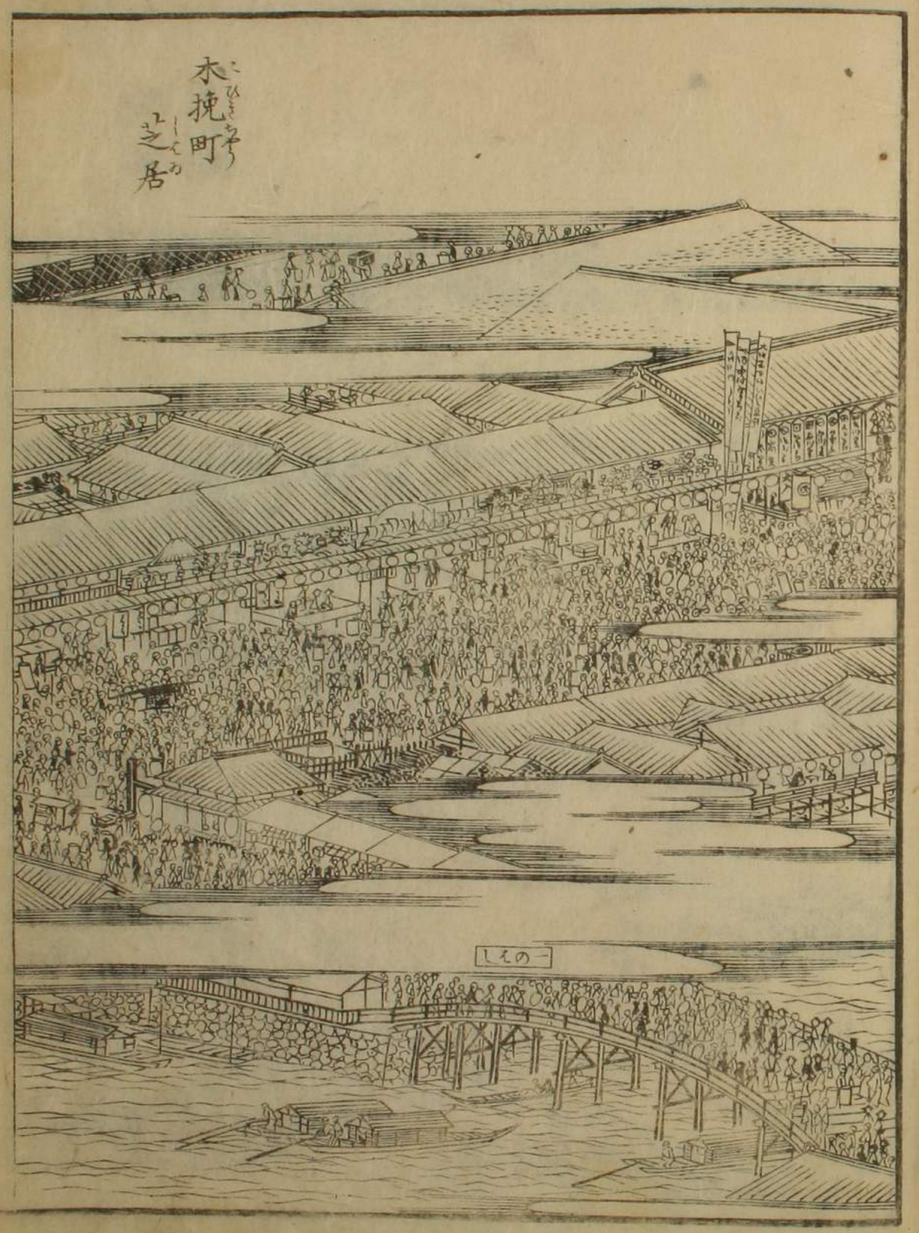
塔中成勝院よ能仙杉風翁の墳墓あり

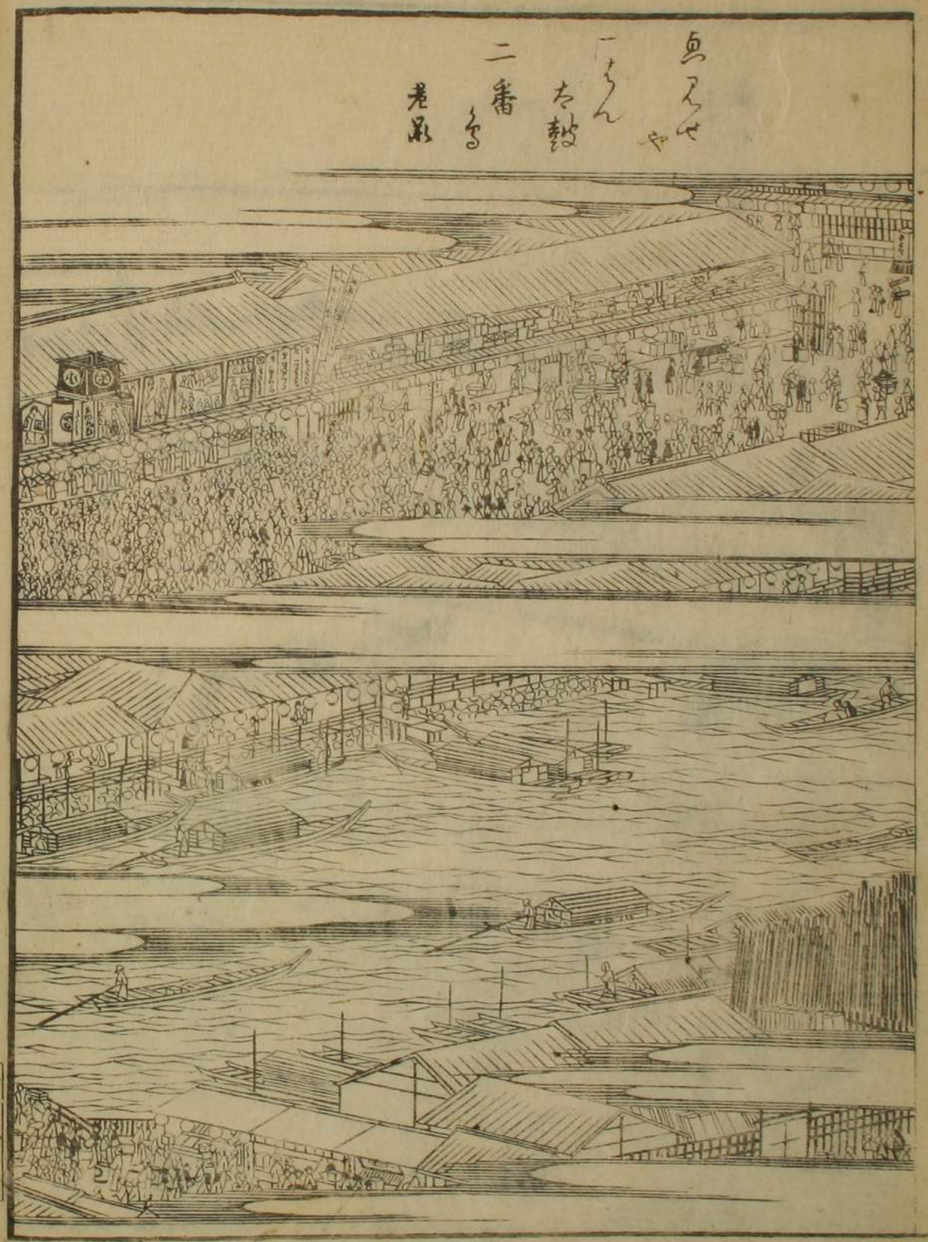


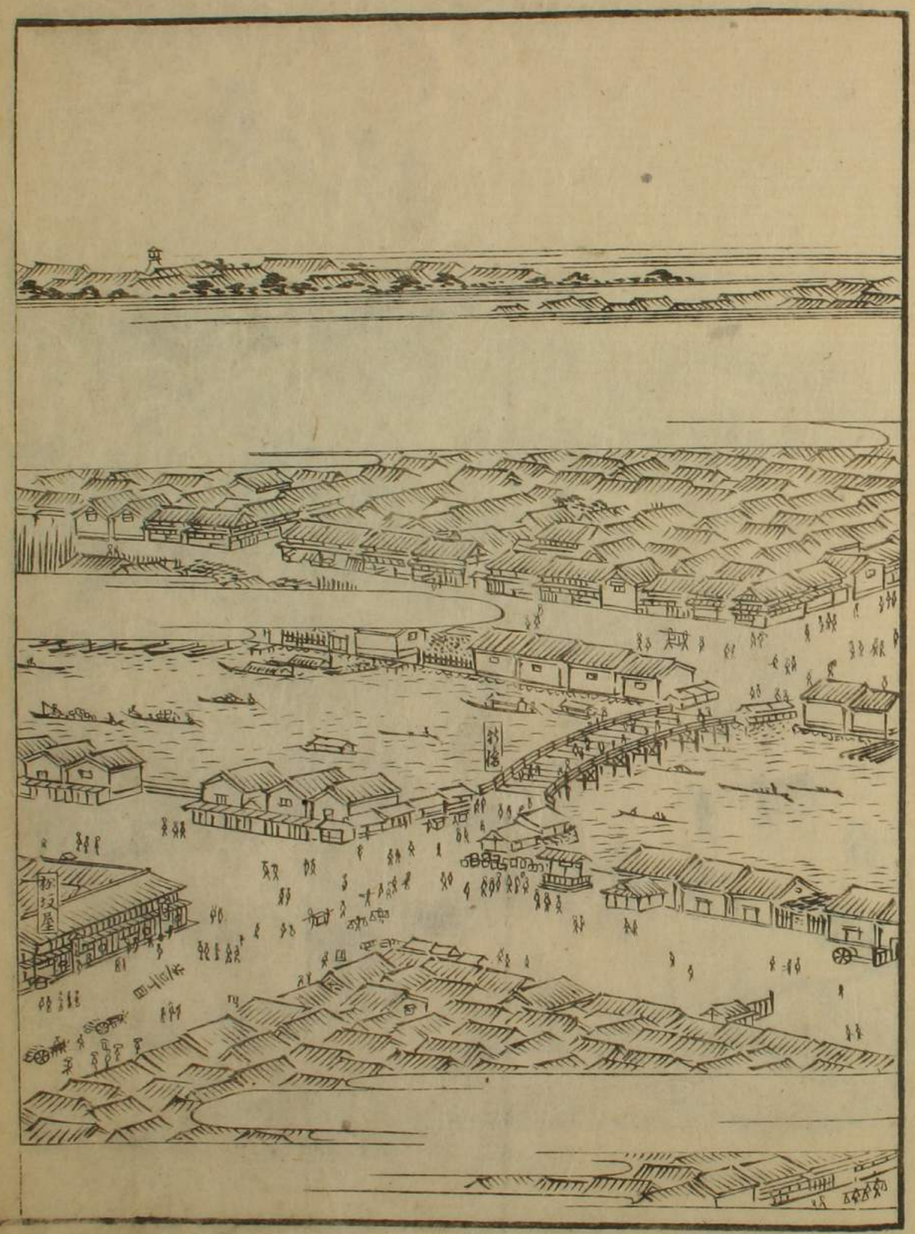
采女ヶ原



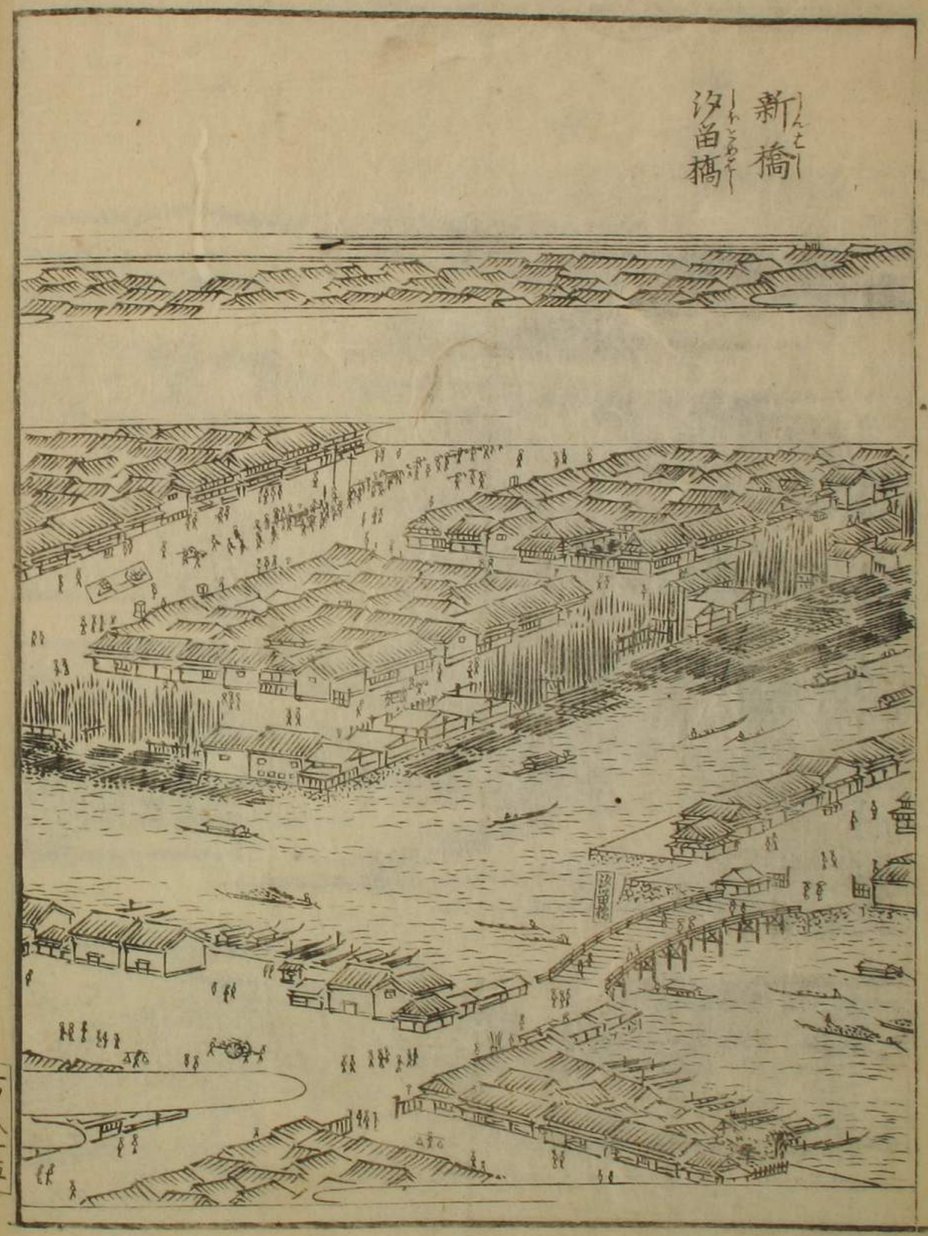


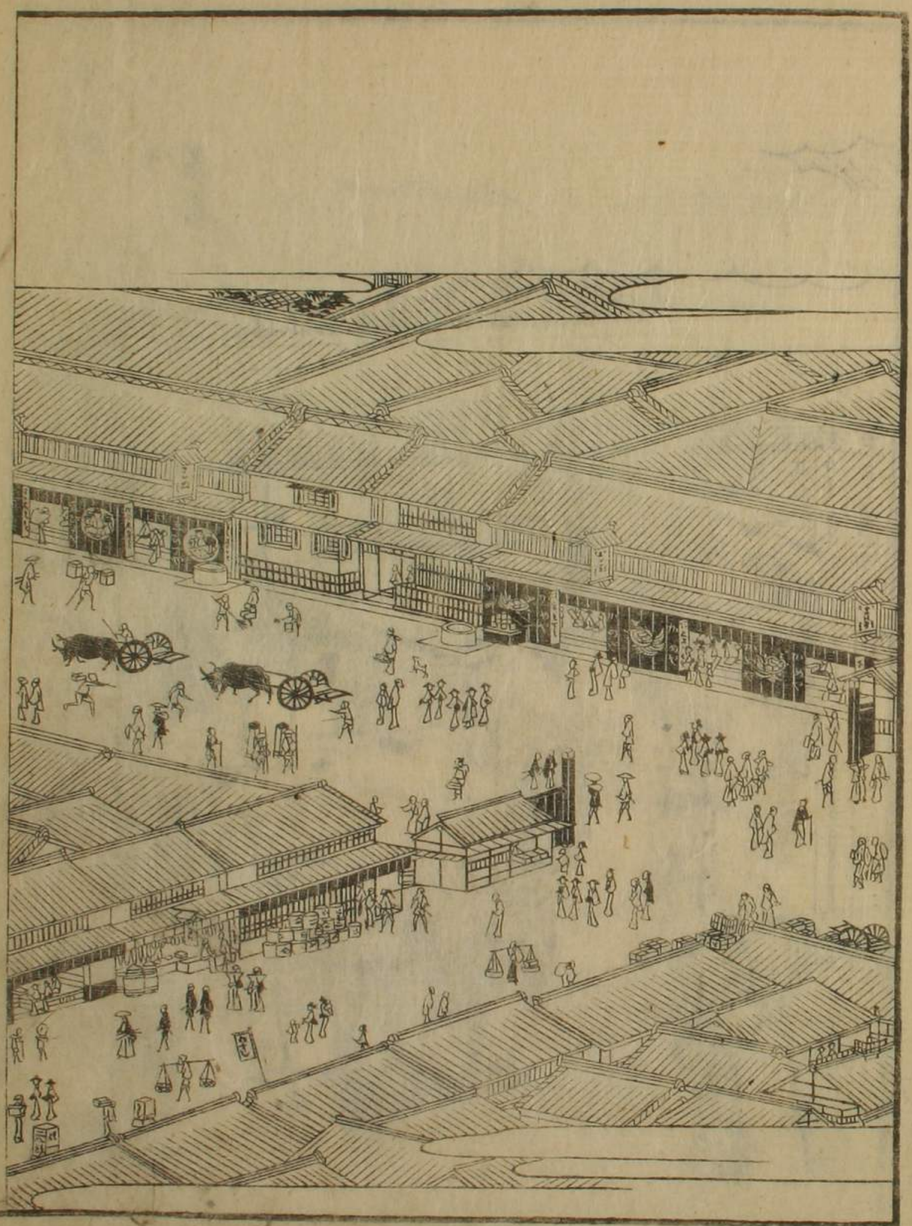

木挽町
芝居
しゑの

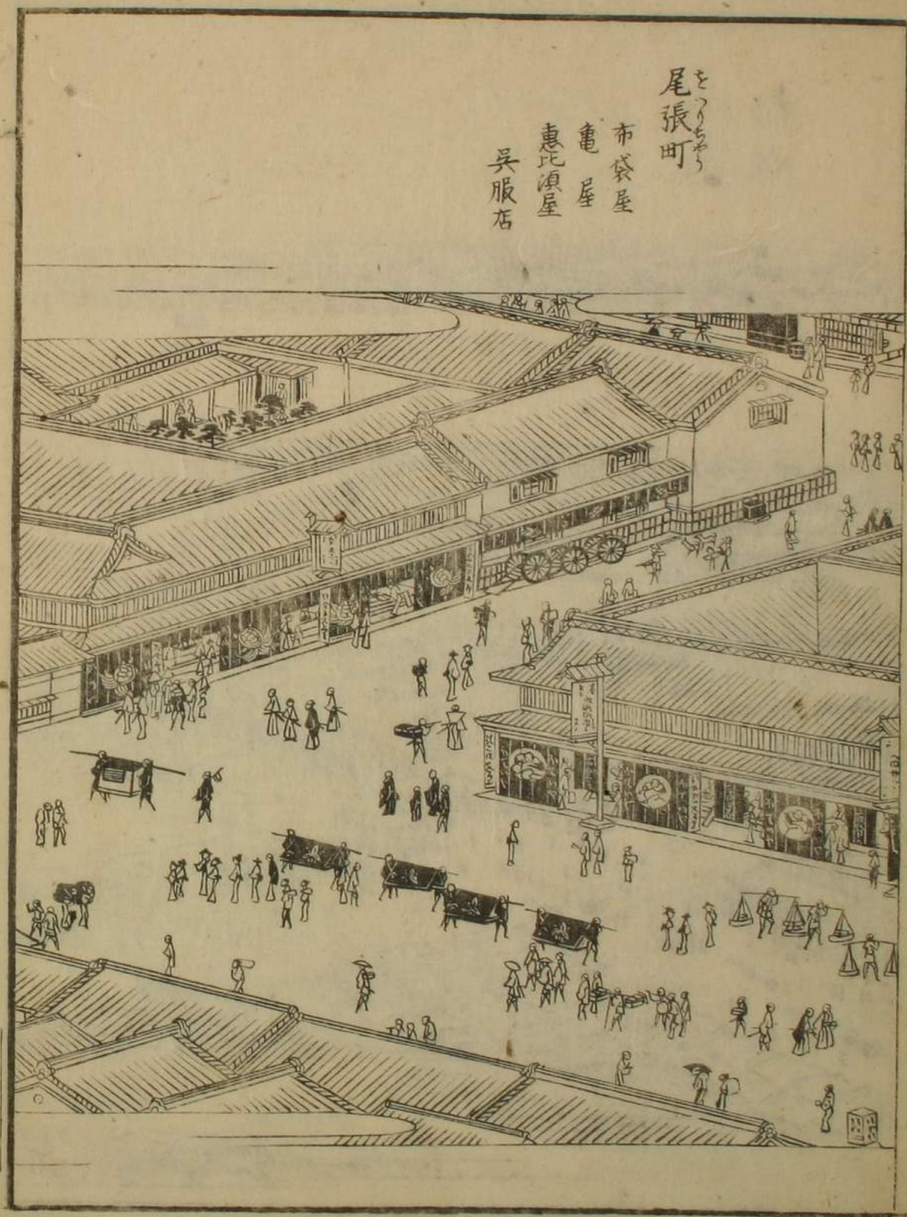

二番
目
景

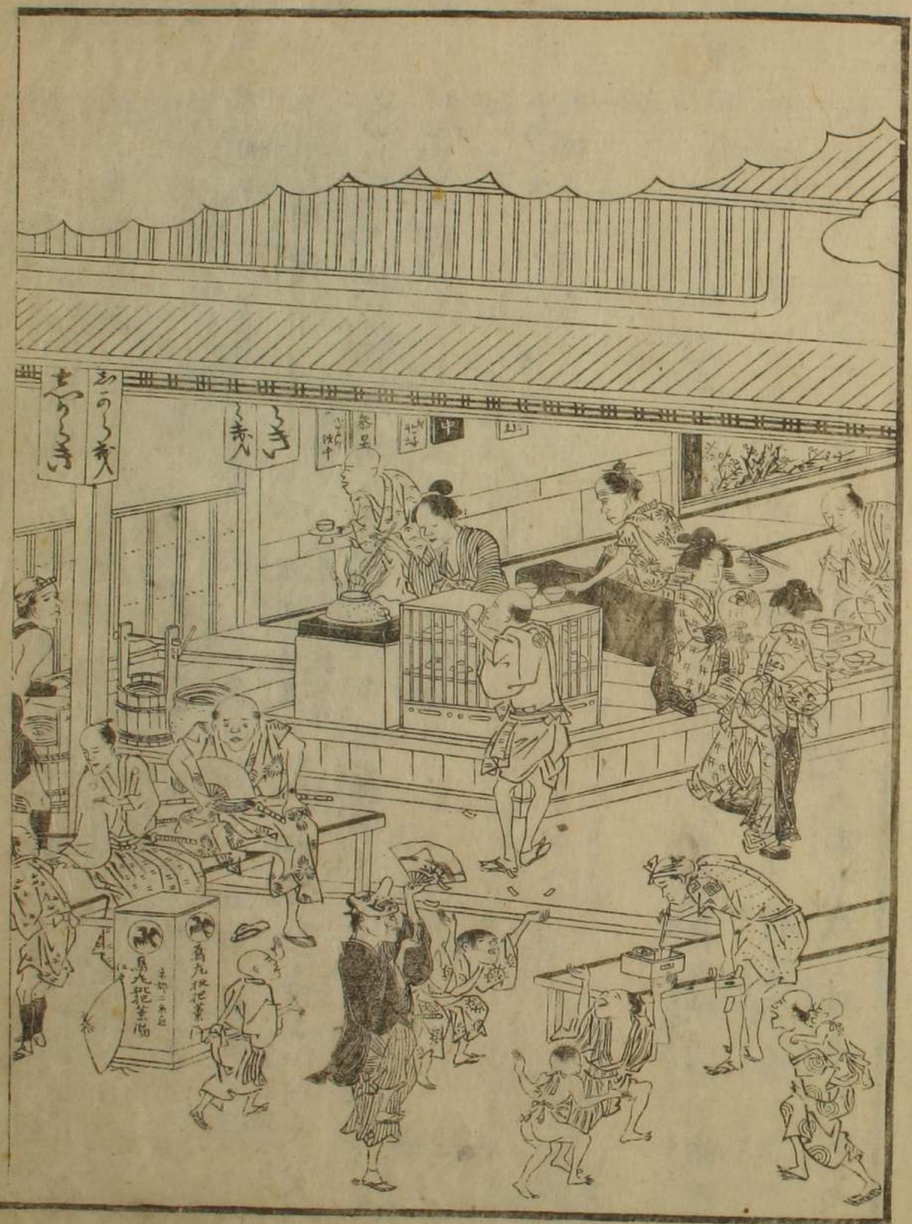


新橋
汐留橋






尾張町
市袋屋
亀屋
恵比須屋
呉服店



金六町
ちゃうしき
茶店

火災の後やしきハ麹町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃迄跡へ新ゝ馬場を開くとあり（馬場の地ハ天明五年今の芝西應寺町その代地ゝ町屋の地馬場なり）此所の井を采女の井とゝもゝ彼やしきの用水なり故ゝ名つけたるなり

寄舞妓芝居　水桶町五丁目ゝあり今森田勘弥の寄舞妓芝居綿くゝとゝ相續す（芝居の基原ハ堺町清屋町寄舞妓芝居の条下ゝ詳なり）昔ハ此所六丁目ゝ山村長太夫とゝ名代の狂言座あり中村市村森田等の芝居とあハせくゝ

芝ゝくゝ四座ありしゝと正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらる山村長太夫座ゝ初めハ岡村長兵衛と云実子なくして徒子七十郎と云ふを養て子とす二代目村五郎太郎つゞ是なり後ゝ名を改て山村長太夫と云ふ是も女子のみありしゝハ婿を養て子とす三代目村相續す此時ゝ至りて断絶せり此芝居ハ正保元年申歳ゝ始まるとゝ東海道名所記ゝ木挽町ゝ喜太夫ゝ浄瑠理外異類異形のものとゝるゝあるハ昔ハ狂言座の外ゝ異せ物の

織田有楽斎弟宅地　元数寄屋町の地なりと云慶長の頃此地を織田有楽斎ゝ賜ひしゝ後ハ空地となりくゝ三四丁ゝ程芝生となり春ゝ摘草夏ハ池水ゝ涼みとゝして其頃ハ林泉の形も残り殊更櫻楓ホの

二樹多く春秋共ゝ遊望の地なりくゝ寛永の頃迄ハ折ゝふるくゝ大樹此地ゝ所遊猟ゝとゝ有せられしゝとあり（有楽斎名長益源五郎と称せ乃共軒と号し法名駿覚信長公の弟なりくゝ茶道を利休居士ゝ受て一家の風あり元和七年ゝ卒せ此人茶ゝ長すゝゝ宅地ゝ数寄屋を建置れし旧跡なりくゝ後世土人数寄屋の唱ゝとしくゝ町の名ゝよくりとなり）

新橋　大通り筋出雲町と芝口一丁目との間ゝ係る正徳元年辛卯朝鮮人来聘の前宝永七年庚寅此所ゝ新ゝ御門を御造営ありくゝ芝口御門と唱へ橋の名も芝口橋と更らるゝ享保九年正月廿九日の火災ゝ焼亡せる迄後ハ復旧の町家とあるれり此川筋の東木挽町七丁目と芝口新町の間ゝ架せるを汐留とゝ

正徳四年江戸圖